

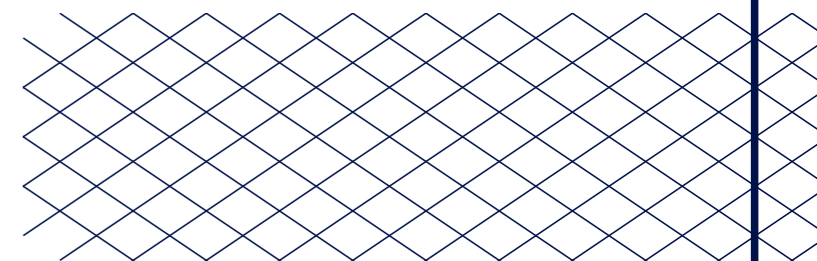
東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre



劇場を創る、という仕事。

アーツアカデミー 10周年。

10th ANNIVERSARY BOOKLET



次世代の芸術文化を育むために

劇場・音楽堂等で働く専門人材の育成は、平成24年6月に公布された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」に明文化されているように、公共文化施設の重要な役割の一つです。東京芸術劇場では、公共劇場運営の専門人材育成をミッションの一つに位置付け、継続的な育成システムの構築に取り組んでまいりましたが、平成25年度より「東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修」を開始し今年度で10年目を迎えました。（本事業は、アーツカウンシル東京が行う「アーツアカデミー」事業の一事業として実施しています。）

本研修事業は、主に公立文化施設の中核を担う人材の育成を目的としています。特徴としては、当館が行う音楽分野、演劇分野、教育普及分野の現場に携わる「OJT（実務研修）」を経験できること。具体的には、当館主催の演劇やオペラ公演、劇場ツアーやワークショップなどの制作アシスタントです。そしてその経験を報告書で言語化するという作業を繰り返すことで、イレギュラーな事態が頻繁に生じる創造の現場に即した対応ができる人材を育成しています。同時に、キャリアの基盤となる豊富な知識をもつ人材になるための「座学」も実施。その内容は、文化政策、公共劇場の役割、舞台芸術の歴史、企画書の書き方などです。また、キャリアを活かすための「ネットワークづくり」の面でも応援しています。

この10年間で、35人の修了生が巣立ち、全国各地の公共劇場、アーツカウンシル、芸術祭事務局やその他の芸術文化分野でそれぞれの力を発揮しています。修了生からは、アカデミー在籍中には、壁にぶつかったことも多々あったけれども先輩・同期に助けられたこと、仲間との交流が刺激になったことや、税金を使って舞台芸術を行う根拠についての考え方を身につけ考える習慣ができたこと、現在の職場においても「このテーマのことは考えた」、こういう業務なら「経験したことがある」という自信と手応えを得たことなど、様々な感想が寄せられています。各地で活躍している姿を時々見聞きする度に、わが子の成長を見るようで本事業の成果を実感しております。

また、昨年度末には、東京都が「東京文化戦略2030」を策定し、「持続性のある芸術文化エコシステムの構築」に向け、担い手となる人材の育成強化を打ち出しています。このことは、創造発信型劇場・音楽堂が全国で増えている中、その継続とさらなる充実のためには、才能あるアーティストへの支援と共に、プロデュース人材の育成が最重要課題と認識されてきていることとも合致し、本研修事業の重要性がさらに高まっています。

コロナ禍に「不要不急」とされた芸術文化は、一時期の劇場・音楽堂のやむをえぬ休館を経て、改めて「なくてはならないもの」という認識をコロナ前よりもなお一層強めています。人々にとって「必要不可欠な」芸術文化を次世代に向けて育てていく担い手として、これからも研修生たちが巣立っていってくれることを切に願っております。

東京芸術劇場
副館長 鈴木順子



アーツアカデミー10年の軌跡。

東京芸術劇場では公共劇場運営の専門人材育成をミッションの一つに位置づけ、継続的な育成システムの構築の一環として、公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京が行う「アーツアカデミー」事業の「東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修」を平成25年度より開始、本年度に10年目を迎えました。

年度 東京芸術劇場のできごと

東京芸術劇場の主な公演／研修生の主な研修事業

2012 (H24)

・リニキュアルオープン
劇場、音楽堂等の活性化に関する法律（劇場法）施行により、「芸術文化の創造発信」「人材育成・教育普及」「賑わい」「国際文化交流」の拠点を目指す

・東京芸術劇場・テルアヒブ市立カメリ・シアター国際共同制作『トロイアの女たち』

2013 (H25)

・アーツアカデミー東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修開始
・Rootsシリーズ開始

・三谷幸喜作・演出／野田秀樹主演『おのれナポレオン』
・シアターオペラvol.1「J・シュトラウス／喜歌劇『こうもり』」
・オックスフォード大学演劇協会(OUDS)来日公演『間違いの喜劇』
・芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー
・古楽ラボ／現代の楽器で古楽奏法にトライ
・ストリートアーティスト・アカデミー2013夏期

2014 (H26)

・芸劇ウインドオーケストラ・アカデミー(WOA)開始

・東京芸術劇場×明洞芸術劇場 国際共同制作『半神』
・藤田貴大演出『小指の思い出』
・芸劇＋トーク 異世代リーディング『自作自演』（第10回）〜（第12回）
・芸劇＋トーク 朗読『東京』（第三回）
・研修生企画『JFC-CLASSICS』失われたリズムを求めて①（1期 黒田さん寄稿）
・芸劇danceダンスファーム『近藤良平のモダン・タイムス』（2期 柴田さん寄稿）

2015 (H27)

・開館25周年

・シアターオペラvol.9 モーツァルト／歌劇『フィガロの結婚』〜庭師は見た！〜新演出
開館25周年記念コンサート「ジヨワド・ヴィーヴル〜生きる喜び〜」（3期中粉さん寄稿）
・Roots Vol.03 寺山修司生誕80年記念『書を捨てよ町へ出よう』
・芸劇＋トーク 朗読『東京』（第四回）
・WOA定期演奏会、出張演奏
・研修生企画『Valentine meets Art』②

2016 (H28)

・日本・シンガポール・インドネシア国際共同制作『三代目、リチャード』
・シアターオペラvol.10 ブッチーニ／歌劇『蝶々夫人』
・Roots Vol.4 『あの大鴉、さえも』
・リロ・ハウアーによる俳優・ダンサーのための演劇ワークショップ
・演劇ワークショップ・ファシリテーター養成講座

2017 (H29)

・アーツアカデミー東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修「教育普及」分野新設
・ボンクリ・フェス「Born Creative Festival」開始
・東京ホワイトハンドコーラスの活動開始

・シルヴィウ・ブルカレテ演出『リチャード三世』
・シアターオペラvol.11「ブッチーニ／歌劇『トスカ』」
・コンサートオペラvol.5「ピゼーリ／歌劇『真珠とリ』」
・英国フランクティック・アッセンブリーによる社会の課題に向き合う演劇ワークショップ実践に向けたファシリテーター・トレーニング③（奥本さん寄稿）
・リロ・ハウアーによる俳優・ダンサーのためのワークショップ④

2018 (H30)

・シアター・コーディネーター養成講座開始

・ボンクリ・フェス2018「Born Creative Festival 2018」
・オックスフォード大学演劇協会(OUDS)来日公演『十二夜』
・演劇系大学共同制作vol.6『Ecstasy』方田の恍惚⑤
・東京ホワイトハンドコーラス

2019 (R1)

・東京演劇道場開始
・劇場ツアー開始
・インクルーシブダンスワークショップ
・「東京のはら表現部」開始
・新型コロナウイルス感染拡大防止のため3/28〜3/29休館

・東京芸術祭「ワールドコンペティション2019」
・野上絹代演出『カノン』（※全公演中止）
・劇場ツアー「東京芸術劇場のトリセツ」⑤
・シアター・コーディネーター養成講座（劇場ツアー編）
・研修生企画 芸劇こどものアトリエ「空間えほんであそぼう！」⑥

2020 (R2)

・開館30周年
・緊急事態宣言のため4/7〜6/7休館

・東京芸術劇場30周年記念公演 シアターオペラvol.14 モーツァルト／歌劇『フィガロの結婚』〜庭師は見た！〜（再演）
・東京演劇道場第二回公演『赤鬼』
・東京のはら表現部
・公演事業に係る鑑賞サポート

2021 (R3)

・緊急事態宣言のため4/25〜5/9休館
・芸劇ウインドオーケストラ・アカデミー(WOA)を、芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド(GOA)に名称改定

・シアターオペラvol.15 團伊玖磨／歌劇『夕鶴』（新演出）
・東京芸術祭2021 芸劇オータムセレクション 特別上映会 太陽劇団シネマアンソロジー
・芸劇eas番外編vol.3「もしもし、こちら弱い派」かそけき声を聴くために〜弱さを肯定する社会へ、演劇からの応答〜（9期 小山さん寄稿）
・芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウインド（9期 前久保さん寄稿）
・芸劇dance workshop 2021 北尾巨(Baobab)ダンスワークショップ
・「東京デイズ／ライズワンダーゼミ」

2022 (R4)

・アーツアカデミー10周年

・シアターオペラvol.16 マスカニ／歌劇『田舎騎士道』レオンカヴァッロ／歌劇『道化師』
・東京のはら表現部「だれもが文化でつながる国際会議」オープニング・パフォーマンス
・研修生企画 劇場ツアー特別編 夏休みこどもツアー「げきじょうのQを集めよう！」⑦



1



2



3



4



5



6



7



7

アーツアカデミー 東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修について

舞台芸術の制作者養成のための研修プログラム

舞台芸術に関わる制作者を育成する、「アーツアカデミー 東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修」は2013年度に開始し、2022年度に10周年を迎えます。未経験者になかなか門戸が開かれていない分野にあって、公立文化施設や芸術団体等で活躍することを旨とする若手人材に対し、舞台芸術分野へのキャリアチェンジに資すること、プロデューサーやコーディネーターとしての資質の向上を目的としています。レクチャーやゼミ、現場での実務研修を通して、制作者に必要な知識や技能を習得し、他の劇場関係者とのネットワーク形成もしていきます。

研 修 内 容

- 現場経験 制作現場で経験を積み、即戦力となることを目指す。
- 座学 キャリアの基盤となる豊富な知識を身につけ、クリエイティブな視点で問題解決力を養う。
- ネットワーク形成 将来のキャリアにつながるネットワークを築く。

上記を研修の3本柱と位置づけることで、将来的には劇場運営の中核を担う、クリエイティブな思考を備えた人材の育成を目指しています。

募 集 コース、内容および人員

研修コース	分野	研修の内容(例)		募集人数
		現場実習	座学	
長期コース (10カ月程度)	演劇制作 音楽制作	・公演制作 ・ホール運営 ・フェスティバル制作 ・広報業務 等	・レクチャー、ゼミ (アーツマネジメント、文化政策、 講読、リサーチ 等) ・レポート作成 (週報、月報および報告書)	各コース 若干名
短期コース (3カ月程度)	教育普及	・ワークショップ制作 ・劇場ツアー制作 ・地域連携企画 ・障害者アーツ運営 ・鑑賞サポート 等		

応 募 資 格

- (i) 職業として劇場や芸術団体等での制作者(プロデューサー、コーディネーター)を目指し、研修期間中、高い意欲を持ち、真摯な態度で研修に取り組むことができる方。
- (ii) 年齢22歳以上35歳位までで、社会人経験があること。
- (iii) 下記①～③のいずれかに該当すること。
 - ① 演劇または音楽の分野で、概ね3年以上の制作経験がある方(劇団、制作会社、フリーランス、大学および大学院等)。
 - ② 文化施設での勤務経験のある方。
 - ③ 企業等において、概ね3年以上の実務経験がある方。
- (iv) 基本的なパソコン操作が可能なこと(エクセル・ワード・メールソフトなど)。

研 修 プ ロ グ ラ ム

- レクチャー・ゼミ
 - 【公開レクチャー】
 - ・世界の劇場シリーズ
 - ・これからの劇場運営と社会デザイン
 - ・アーツマーケティング
 - ・劇場にドラマトウルクは必要か
 - ・文化政策と制作現場のつながりを考える
 - ・P.F. ドラッカーに学ぶ「非営利組織と自己のマネジメント」

- 【館内ゼミ】
 - ・劇場法と日本の公共劇場
 - ・劇場と舞台技術について
 - ・フェスティバルについて
 - ・演劇プロデュースについて
 - ・音楽プロデュースについて
 - ・企画製作・発表 等

- 他館見学、出張研修
 - 他の劇場や音楽堂を見学し、スタッフと意見交換することで、各地の公立文化施設についての知識を深める。
 - ・新国立劇場
 - ・東京文化会館
 - ・世田谷パブリックシアター
 - ・あうるすぽっと
 - ・彩の国さいたま芸術劇場
 - ・いわき芸術文化交流館アリオス
 - ・KAAT神奈川芸術劇場
 - ・STスポット
 - ・城崎国際アートセンター
 - ・芸術文化観光専門職大学
 - ・SPAC一静岡県舞台芸術センター
 - ・可見市文化創造センター
 - ・兵庫県立芸術文化センター ほか多数

- 面談
 - 日々の業務や研修内容、進路相談など、職員との面談を定期的実施。

- レポート指導
 - 週報・月報・報告書を執筆し、研修での学びを言語化することにより客観的な視点と分析力を身につけ、「芸術文化」を伝える言葉の力を培う。

研 修 の 様 子



研 修 生 企 画

劇場ならではの空間美術の中で、参加者はオリジナルの楽器を作り、演奏しながら絵本の世界を楽しむワークショップを開催。研修生がプロデューサーとなって自ら企画・制作、チラシもデザインしました。



館 内 ゼ ミ

アートマネジメントの専門家や芸術職員が講師となり、舞台芸術の背景や現場の最前線について学びます。ディスカッションによって問題点を見極め、レポート指導を受けることで論理的な思考を身につけます。

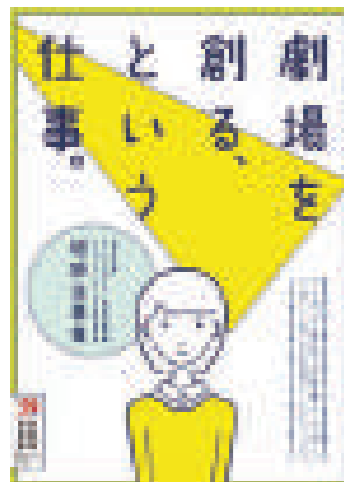
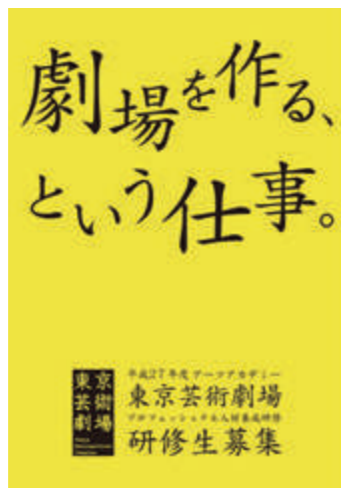


他 館 研 修



首都圏や地方の公共劇場および芸術団体を訪問し、それぞれの特質を生かした取り組みや、地域に根差した実践を見学します。また、現地のスタッフたちと意見交換することで、その後のネットワーク形成につなげます。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京・東京芸術劇場



10周年

アーツアカデミー修了生による寄稿

「アーツアカデミー 研修と私」

現在、舞台芸術の各現場で活躍する修了生に、研修に参加する前の経歴や参加のきっかけ、修了後のキャリア形成について、これからプロフェッショナルを目指す人々へのメッセージとして、様々な角度から「アーツアカデミー研修」を語っていただきました。

「アーツアカデミー研修のすすめ」

東京の大きい劇場が研修生を募集するらしい。

当時、地方の中小企業勤めだった私の耳に、この情報が入ってきたのはもう10年も前のことだ。

大学で4年を費やすからには、将来の職業に繋がることを勉強したい、と拙い思考を巡らせた結果、それまで演劇に触れたことも無かったのに、なぜか唐突に18年の人生史上最も衝撃を受けた映像（舞台）が頭に浮かび、それを手掛かりに寄り道だらけのぐにゃぐにゃ街道を進み、東京芸術劇場の事業第二係（演劇）の職員の今に至るのだから、人生とは不思議なものである。

私が研修に参加した理由は、劇場制作への糸口を掴むためだった。この文章を読まれている方々の多くはご存じかと思うが、劇場界隈の就職というのはなかなか狭き門である。というか、まずその門すら見えるところには無い。毎年新卒採用を行う一般企業とは違い、劇場側が人材を欲するタイミングに合わなければ、採用試験（？）にすら漕ぎつけない。大学新卒のタイミングで出会えなかった私は、大人しく一般企業に就職したものの、どうにも諦めきれず、これまで出会ったあらゆる人を頼りながら、制作への道を模索していた。そこで出会ったのが、このアーツアカデミー研修募集の知らせであった。とはいえ、ツテがあるわけでもなく、実績は学生時のものしかない。自信が持てず、書類締切当日に最寄りの郵便局に間に合わなくなった時点で一度は諦めた。だが、結局深夜に赤羽の郵便局まで駆け込み、書類を提出したことは今でもよく覚えている。まさかの書類通過の知らせが届いたときは、本当に驚いた。実は、その後の二次面接も諸事情により一度は辞退の申し出をするという、二度目の諦めがあったのだが、研修に至るまでの自分語りはこちらまでにしておこうと思う。（十分過ぎる。）

研修中印象に残っていることは数多くあるが、一番苦しくも身になったのは2年間の締めくくりとして取り組んだ研修生企画だ。（元々長期〈約1年〉コースであったが、1年目の早いタイミングで当時の担当者から、制作を一から勉強するのに1年では短いだろうから、次年度も継続を検討してみてもどうか、と提案いただいた経緯があり、2年在籍したのである。）最も難しいと感じたのは、当該企画が全分野の研修生（音楽、演劇、舞台技術）主体で行われたことに起因する。企画内容は現代音楽とコンテンポラリーダンス、一見するとありそうな企画だが、かけ出しの研修生同士には難易度が相当高かったように思う。公演名を決めること、予算の割り振り、リハーサル場所やタイミング、宣伝と営業、あらゆることに大変さを実感したが、研修の総まとめとして1つの企画を立ち上げから後処理まで行ったのは、その後の制作業務の礎になった。（もう8年近く前のことですが、出演者の方々はもちろん、バックアップをしてくださった劇場スタッフ、関係者の方々、そしてご来場くださったお客様方に、改めて感謝申し上げます。）

本研修の最大の魅力は、実際の東京芸術劇場の企画にスタッフとして入り、現場に身を置きながら様々なことを学べる点である。また、研修生には多種多様な人々が集まるため、実務的な研修内容以外にも学ぶべき点が多かったと今更ながらに思う。何より、私のような実務経験の乏しい、東京の劇場に何の縁もなかった地方在住の人間でも、この業界へ一歩踏み出すことができた貴重な場所であった。当時の自分に言葉をかけるとしたら、「頑張れ」の一言しかないのだけれど、本研修が、今後も多くのこの業界を目指す方々にとって、開かれた扉のような存在であることを願っている。

アーツアカデミー10周年おめでとうございます。

私はアーツアカデミー初年度の2013年11月から2014年2月までの3カ月間、音楽分野の短期研修生として参加しました。その後2014年から2年間はアーツカウンスル東京のアーツアカデミー調査員に採用いただき、さらに2015年から3年間は東京芸術劇場で研修生の受け入れも担当しました。2年間の芸劇職員生活を経て、2020年に大学に転職してからも研修生ゼミの講師を務めていますので、アーツアカデミーにはひとかたならぬ恩義を感じております。この場を借りて関係各位に御礼申し上げます。

私は2011年から2年間ドイツに留学して博士論文を執筆していましたが、日本に戻ったあとに仕事をするあてもなくどうしようかと思っていたところ、東京芸術劇場のホームページで研修生募集の告知を目にしました。3カ月間の短期研修に参加すると、その対価として7万5千円が支払われることに惹かれ（改めて見直したら75万円の間違いでした）、一時帰国したタイミングで池袋へと面接に向かいました。面接官には副館長の高萩さん、事業企画課長の高橋さん、アーツカウンスル東京プログラムディレクターの石綿さん（肩書はすべて当時）がいらして、今の日本のオペラは海外からの引越越し公演ばかりだが、これからは日本人のプランナー陣による〈日本のオペラ〉を制作することが必要だと訴えた記憶があります。運良く採用いただき、本帰国後に日本の公立劇場の内部を偵察する目的で研修に参加しました。当時は今のように研修生向けのゼミも多くは用意されておらず、勤務時間もフレキシブルだったので、研修生というよりもオペラ制作アシスタントのような気持ちで参加していたと思います。研修初日、人材育成担当係長（当時）の橋爪さんとの面談で「短期の研修では劇場運営を理解するには時間が足りないと思うけれど」という話があり、表面上は「そうですよね」と返答しながらも「短期でも理解してみせる！」と思ったことを覚えています。今から振り返れば、もちろんそんなに生易しいものではないわけですが…（生意気な研修生ですみませんでした）。指導を担当してくださった中村さんは「君のように現場を知っている人材が、将来大学に勤めて助成金の審査などに関わるべきだ」という（今から振り返ると、実的に確かな）進路を示してください、実務だけでなく将来のアドバイスもいただけたことに深く感謝しています。

3カ月という短い期間でしたが、研修に参加する中で色々な疑問を感じました。

- ①ドイツの劇場では主催事業しか行われていないのに、なぜ芸劇は貸館も行わなくてはならないのだろうか。
- ②ドイツの劇場では小規模なホールでもオペラが上演されるのに、なぜ芸劇ではシアターイーストやプレイハウスでなく一番大きなコンサートホールでオペラ公演を行うのだろうか。
- ③ドイツの劇場ではオペラのリハーサルは6週間かけるのに、なぜ芸劇では4日間しかないのだろうか。（この点については当時の報告書にも書きました）
- ④ドイツの劇場では1度作ったオペラは何度もレパトリーとして上演されるのに、なぜ芸劇では1公演で終わりなのだろうか。
- ⑤ドイツの劇場では職員は個室もしくは少人数の部屋をあてがわれているのに、なぜ芸劇は全員が大きな事務所で大声を張り上げながら勤務しているのだろうか。
- ⑥ドイツの劇場では夏に6週間の休暇があつて劇場を閉めるのに、なぜ日本の劇場には長期休暇がないのだろうか。
- ⑦ドイツの劇場にはドラマトゥルクがいるのに、なぜ日本の劇場にドラマトゥルクはいないのだろうか。

……などなど、挙げればキリがありません。当時は帰国したばかりで、今考えれば「ドイツはこうなのに！」という思いが先行して頭でっかちだったと思います。ですが今振り返ってみると、私はこのとき感じた疑問を少しでも解決することを目指してその後のキャリアを歩んできたのだと思います。例えば②の問題意識を出発点として2019年にシアターイーストで赤ちゃん向けのオペラ『ムルメリ』を企画したり、③の問題意識を出発点として私自身が全国共同制作オペラのプロデューサーを務めた際には少しでも多くのリハーサル日数を確保したり、⑦の問題意識を出発点として2021年の全国共同制作オペラ『夕鶴』では私自身がドラマトゥルクを務めたり。新しい環境に適応する中で感じた疑問が、その後10年間の私自身の活動を助けてくれたと感じています。

劇場には色々な独特のルールがありますが、それらの多くは絶対に守らなくてはいけないものではなく、スルーせずに疑問を持って変えていくことが必要です。これからの10年間も皆で大いに声を上げて、日本の劇場環境をより良いものにしていきましょう！



「疑問に助けられた10年間」

10代の頃から、将来は地元（岩手）の劇場を拠点に文化芸術事業に携わることを目標にしていました。大学卒業後は民間の制作会社に勤めていましたが、3年経った頃、アーツアカデミー2期生の募集を知り、東京芸術劇場というネームバリューにまず魅かれ、そしてアルバイトせずに生活できるだけの報酬があることにさらに魅かれ、これなら劇場の仕事をがっつり学べると思い、申し込みました。今思うと、特にこの事業に携わりたいというのなれば、具体的に何を学びたいというものもなく、とにかく、いつか地元に戻ったとき役立つ経験を身に着けたい一心で、申し込み時には、オペラ事業に携わることになるとは想像もしていませんでした。

私は短期コースの音楽制作で研修を受け、実務では、石川県立音楽堂との共同制作オペラに制作補助として携わりました。当時は北陸新幹線の開通まであと1カ月という頃で、列車を乗り継いで金沢に向かったのが懐かしいです。オペラは総合舞台芸術なので音楽、演劇、舞踊、美術などのあらゆる舞台芸術のスペシャリストたちと作品づくりをする一端に関わらせてもらったことはとても貴重な経験でした。コンサートホールであっても一般的な多目的ホールであっても同じように上演するための演出やセットの工夫、歌声や管弦楽の音を美しく届けるアーティストの実力とスタッフの技術が結集した作品を目の当たりにして、工夫次第で本格オペラをどこかの劇場でも見せられることを実感しました。現在勤めているホールでは定期的にオペラを上演できるほどの体力はありませんが、いつか実現したいと、研修前には考えもしなかったことですが、私の新たな目標の一つとなりました。

研修では実務だけでなく座学もあります。短期研修のため受講できた座学は多くはなかったですが、専門分野に偏らない内容で、公共ホールのマネジメントについてじっくり考えることができました。さらに毎週、毎月のレポート作成に際し、経験したことを言語化して考察することを繰り返していたので、物事を客観的に捉えたり思考したりする力が鍛えられたように思います。これは舞台芸術の制作に限らず、社会人として大切なスキルだなと感じています。そして何より研修仲間含め、多くの方と人脈を築けたことは私の財産です。

研修終了後は、ロームシアター京都に4年勤め、現在は地元・岩手県にある公共ホール（北上市文化交流センター さくらホール）の企画事業課職員として働いていますので、かねてからの目標の第一段階は達成できたと思います。ただ、当時の自分に声をかけるとしたら、もっと勉強するようにと伝えたいです。研修はとても充実していましたが、研修プログラムを履修することだけに満足せず、他所の公演を1本でも多く観たり、本を読んだり、もっと見聞を広げ、知識を蓄積すればよかったと思います。今になって思いますが、勉強する時間はこの頃が一番ありましたし、躓いたとき、アドバイスがほしいとき、芸劇には相談に乗ってくれる専門家たちがいらっしやいますから、もっと学ぶことに貪欲になればよかったなと感じています。あと…自分が想定していたより早いタイミングで居住地を転々と変えたので、引っ越しに備えて、節約するようにも伝えたいです。



2期

短期コース 音楽制作分野

安藤綾乃 Ayano Ando

北上市文化交流センター さくらホール
企画事業課

「アーツアカデミーで 得たもの」

2期



長期コース 舞台技術〈照明〉分野

柴田晴香 Haruka Shibata

フリーランス（漫画家・イラストレーター）

「別業種でも活かされる経験」

この度アーツアカデミー研修が10周年を迎えるとのこと、誠におめでとうございます。

私がアーツアカデミー研修に出会ったのは、大学4年生の年明け頃だったと記憶しています。

当時、四年制大学の演劇コースを卒業間近に控えていた私でしたが、未だに就職先が決まっておらず、「このままフリーランスとして照明会社でアルバイトをしながら活動しようか」と考えだしていた時でした。大学の恩師から「公共劇場で長期のインターンを募集している。しかも舞台技術分野がある」と知らせをもらい、実務経験も実績も乏しい自分が採用されるわけがない、とだめはもともと応募しました。

まさか採用になるとは思っておらず、結果を待ちながらも、照明会社へ問い合わせをしていたことを覚えています。

運が良かったのか採用となり、大学を卒業後、ありがたいことにそのまま一年間長期のインターンとして大変お世話になりました。

今振り返ると大変贅沢な環境で、多くの機会をいただきながら研修していたと思います。設備や規模だけでなく、とても貴重な出会いも経験させていただきました。

学生上りの私にとっては初めて経験する社会で、技術だけでなく、組織内での関係性や立ち振る舞いなども勉強させていただいたように思います。

この時お世話になった職員のみなさまや、異動になった職員の方々も含めたご縁は、実は今でも繋がっていて、私の人生のターニングポイントとなる出会いだったと言っても過言ではありません。

特に印象に残っているのは、年末年始をまたいで制作されたダンス公演『近藤良平のモダンタイムス』です。

実は研修が終了する間際には、「研修生企画」と称して、音楽制作・演劇制作・舞台技術の3セクションの研修生が合同で1つの作品を作り上げた機会があったのですが、私の中ではこの『モダンタイムス』の方が印象が強く残っています。

『モダンタイムス』は劇場の主催事業で、スタッフも、音響・照明を劇場スタッフで担っていました。そのため、研修生であった私にも、作品中にスポットライトを操作する役割が割り当てられ、大変緊張しながらも下手くそなスポットライト裁きを披露したのでした。

単純に、自分に本番中の役割が割り当てられたから印象が強く残っているわけではありません。この公演の制作環境が“自分たちの劇場を使って制作しているからこそ”の贅沢さがあったこと、そして、学生上がりであった私にとって、オペレーターでなくとも明かりを覚える・きっかけを覚えるほど作品に深く携わるといふ、照明スタッフとしての基本的な心構えを教えていただいたと感じるため、強く印象に残っています。

少々変わった舞台装置との共存を図るために、特に照明部は年末年始をまたいで劇場で常に作業をしていた、という、若干の過酷さを味わったからだとも言えるかもしれませんが。

研修卒業後の就職先も、この研修中に会った方の照明会社へと繋がりましたし、更に結果的には、今度は“職員として”劇場へ舞い戻ることにも繋がりました。私の舞台照明スタッフとしてのキャリアは、全てこの研修から繋がっています。

実は今は舞台制作の現場から離れ、フリーランスの漫画家・イラストレーターとして仕事をしておりますが、クリエイターとしてはなかなか珍しい経歴として面白がられます。自覚はあまりないものの、携わる方からは感性が独特で面白いと評価をいただくこともあり、それはきっと舞台制作に携わっていたからこそ感性が培われたのだと思います。全く別業種で関連が無いように思えますが、“私自身を”作り上げてきたものとしては、非常に大きなウエイトを占めていることは確かです。

研修当時、どうしても「公共劇場の枠」に捉われずに舞台制作に携わりたくなり、途中で辞めたくなることもありましたが、今では公共劇場だから見ることができた景色、身を置けた環境、培えた関係性があると思っています。大変貴重な経験をさせていただきました。

一年間、未熟な学生と変わらないような人材の面倒を見なければならなかったことは、大変な負担だっただろうと、今では容易に想像できます。諦めず育ててくださった関係者の皆様、特に舞台管理の皆様には大変感謝致します。

改めて、アーツアカデミー研修10周年、心からお喜び申し上げます。

2期



短期コース 舞台技術〈音響〉分野

杉浦 綾 Aya Sugiura

音響芸術専門学校 教員

「嗚呼、なつかしき芸劇」

音響芸術専門学校を卒業した私は、イベント系の音響をはじめ、ライブハウス、レコーディングスタジオ、ボーカルクール、舞台音響・・・と、どうにか「音」の枠にしがみつきたいと、仕事を転々としていました。そんな時、学生時代からお世話になっている職員の方からアーツアカデミー研修の募集を教えてください、面接を経て参加することに。長期での研修に参加できればもっと良かったのですが、すでに決まっていた舞台の時期と重なっていたため、短期の研修生となりました。

研修修了後は、プライダル音響の仕事を経て、現在は、母校にて教員をしています。研修後のキャリアとしては少々珍しいパターンかもしれませんが、自分自身が技術者として現場にいるわけではありませんが、未来の技術者を育てるべく、今までの経験を学生に伝えています。

研修に参加したのは、もう随分と前のことになる上、3カ月という短い期間でしたが、とても楽しく充実した日々だったことが今も強く記憶に残っています。

幼少のころからクラシックやオーケストラ楽器に関心があった私には、大ホールでの現場研修は、魅力的なものばかりでした。オーケストラのリハーサルの際に、誰もいない客席に座り、座席によっての音の響きや違いを聴き比べ、吊りマイクの位置決めを任せていただいたり、パイプオルガンのメンテナンスに立ち会ったり、研修生ならではの貴重な経験が出来ました。

プレイハウスでの『小指の思い出』の公演では、マイククエアのアシスタントに入らせてもらいました。研修以前にもマイククエアスタッフとして公演につく経験はありましたが、マイク養生に使用する道具も、やり方も、今まで知らなかった方法を知ることができ、非常に勉強になりました。この時に教えていただいたことを、今も学生に向けて話しています。

中でも一番記憶に残っているのは、バックステージツアーです。プレイハウスの機構を音楽や効果音と照明に合わせてダイナミックに動かし、お客様にバックステージを見学いただくプログラムでした。音響デザイナーを任せられ、先輩と相談して曲目はホルストの『木星』に決定。客席後方に設置されているスピーカーも使って汽車が客席を一周するような音

響デザインを行いました。前日のリハーサルでは、オペレーターの明治座舞台の大先輩に「もっとゆっくり動かしてほしい」「もっと音を大きく」などと偉そうに注文をつけたことを覚えています。

そして、当日。まさかの大・大・大寝坊をしてしまい、起きたのは入り時間でした。今までこんな寝坊など、したことなどなかったのに…ましてや、なぜ今日なんだ…やってしまった…と冷や汗ダラダラで劇場に向かい、謝罪、謝罪、謝罪。申し訳ないやら、恥ずかしいやら、大恐縮でしたが、スタッフの皆さんが笑いながら、「お、社長おはようございます！」「プランナー、全て準備が整ってますよ！」「眉毛がないね！」といじってくださることに大変救われました。おかげさまで本番は大成功でしたが、今も思い出すだけでもひやっとします。

そんな研修期間で、私に課された報告書課題は「音響担当としての安全管理について」でした。『小指の思い出』でワイヤレスクエアを担当したため、ワイヤレスクエアスタッフの目線から、安全管理について考え報告書を作成いたしました。当時は作成することでいっぱいでしたが、あの時に調べ、学んだことで、今も「人にもものにも安全第一」を意識しています。

このように、考えてみると研修がきっかけだったな、ということも多く、アーツアカデミー研修参加が今の自分自身に活きていると実感します。

一つひとつの公演やメンテナンスなどの業務以外にも、仕事や空き時間などに、職員や明治座舞台の皆さんと話したことも、本当に楽しい時間でした。仕事の話聞かせていただいたり、しょうもない話で爆笑したり。3カ月があっという間でした。研修修了時には、職員の皆さんと、明治座舞台の皆さんが送別会を開いてくださいました。本当にありがたいやら嬉しいやら…。ちなみに、職員の皆さんから送別会時にいただいた東京芸術劇場のスタッフパーカーは、職場で大切にしています。

最後になりますが、東京芸術劇場アーツアカデミー研修10周年、誠におめでとうございます。今後ともさらなるご発展を心より願っております。

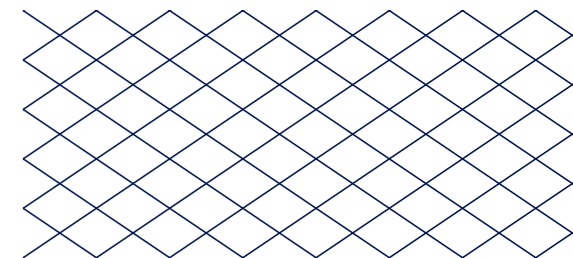
私が研修に参加した目的は、キャリアの転換を目指すためでした。それまでの自分は、出版業界の片隅で10年以上編集の経験をして、ひょんなことから公共施設（図書館）で働くこととなり、さらに公共文化施設で働くうえでのキャリアアップするにはどうしたらいいかと考えていました。改めて自分の経歴を振り返ったときに、原点に立ち返ってみようと思いつき、芸術に係る現場で働いてみたいと強く考えたことも応募の動機です。今は東京都立総合芸術高校となっている「都芸」の音楽科出身で、同級生にはプロの音楽家として活動している人もおり、彼らを支えるような仕事に今からでもチャレンジできるだろうか、と迷ったとき、この研修制度が背中を押してくれました。

当時はたまたま、同じ豊島区内に職場がありましたので、短期の研修なら両立できるのではと考えたのですが、現場が回り始めるとそんな甘い見通しではとても通用しないとわかって、早々に研修に専念することになりました。短期コースのため、3カ月の研修期間中に経験できる音楽事業の現場は限られていましたが、当時の事業第一係の皆さん、人材育成担当の方々にあたたかくご指導いただきました。個人的には、古楽器オーケストラによる公演のリハーサル・本番に立ち会えたことや、コンサートホールのロビーにある展示ケースでの公演関連展示（作曲家の往復書簡や年譜）を担当できたことが、特に思い出深いです。

研修を通して得たものを、あえて誤解を恐れずに言いますと、現場の厳しさを身をもって知れたことが大きいです。事務方と現場は車の両輪のようなものと言われますが、自分の適性はどちらの比重が高いのかを体験から知ること、その後自己を見つめ直し、前向きに磨いていく努力ができたと思います。

また、直接の研修内容とは無関係ですが、ひとつ残念なことがあるとしたら、私が参加したときの研修生はすでに長期のメンバーとして馴染んでいて、その中にとから入っていくのが難しかったことでしょうか。私のように異業種を経て中途からのキャリア形成を目指すよりも、これから社会に出るような新卒寄りの割合が高く、ジェネレーション・ギャップもありました。今は募集の時期や人数、社会人経験ありといった応募資格も当時からだいぶ変わっており、各々が社会人経験を活かし目的意識をもって、研修生どうし刺激を与え合いながら研修に取り組んでいるのは、大変よいことだと思います。決して硬直した研修制度ではなく、カリキュラムも含めてこうして進化していく点も、10周年を迎えるほど継続できている所以ではないかと推察します。

私は研修生時代の出会いやその後のご縁を得て、現在劇場の管理運営に係る業務に取り組んでいますが、いわば縁の下の力持ち的な役割であり、自分には合っていると実感しています。それも、漠然としたイメージや憧れだけでなく、現場の苦勞を身をもって知れたことが、翻って、劇場で働く人たちをサポートする喜びにつながっているのだと思います。当時の自分に声をかけるとしたら、何も無駄になることはないのだから信じて進みなさい、と伝えたいです。



3期



短期コース 音楽制作分野

伊東 絵里子 Eriko Ito

東京芸術劇場 管理課管理係

「アーツアカデミー 研修と私」



「『劇場で働く』きっかけの一步」

大学を卒業して社会人一年目の年より本研修に二年間参加し、演劇の公演制作・ホール運営、および、劇場のアクセシビリティの分野について、幅広く現場で学ぶことができました。もともと、大学ではアーツマネジメント等、概念の部分・実例を講義の形で学び、学生団体の公演制作を担当して様々な公演に携わる活動をしていました。卒業後に演劇制作を仕事にするためには実際にどのようにアプローチをすればいいのか迷っているときに、本研修のリーフレットをみつけ、「劇場で働く」ということに興味を持ったのが研修への参加のきっかけです。また、若手のカンパニーが劇場と提携していくことでステップアップしていくという一つのルートが出来上がってきていた中で、どのような制作のアプローチがカンパニーサイドに必要なのかということにも興味を持ち出していた時期でもありました。「演劇」を仕事にするということにおいて、あまり具体性が持てていない中で、本研修に参加することで何か広がり生まれるのではないかと思い参加しました。

本研修は、主にキャリアチェンジの方を対象としておりますが、私が参加した一年目は、全員新卒メンバー。学生時代での経験だけでは想定できない様々なことも、本研修の担当者フォローアップしてもらいながら研修を続けることができました。実務研修・講座・他館研修・研修生企画と充実した内容で、様々な研修プログラムを通し、学びを深めていくことができ、興味ある分野にも具体性が生まれていきました。また、報告書という形で知識をインプットしたままにせず、文章化しアウトプットができ、研修内容を整理することもできました。スケジュールが重なっていき優先順位の判断ができずハードなタイミングもありましたが、有益な二年間であったと思っております。

最初に演劇ホールの貸館業務の補佐・若手提携公演の業務補佐として研修に参加し、劇場運営・施設についての基本を学ぶことができたのは、私にとっては重要な経験でした。劇場の施設運営という観点から、様々なカンパニーと対面することで、「自分たちの発信したい作品を創ること」と「公共の劇場と提携・共催をすることで生まれる効果」について意

識するようになりまし、複合型の芸術文化施設として求める劇団・カンパニーとはどんな団体なのかを、劇場の立場から考えることができました。貸館の業務を通し劇場を広く見ること、「演劇」を仕事にする「劇場で働く」ということに具体性が広がり始めました。そして、貸館業務の研修の後、公演の制作現場に携わらせていただきました。様々なクリエイションの現場に入ることができ、日々学びの連続でしたし、報告書のテーマを通し現場に立ち会うことで、ミッション達成に向けた事業展開という視点を持つことができました。特に、「朗読東京」という事業で、東京における演劇という観点で報告書を進めていく中で、地域における劇場の役割とは何かと考えるようになりました。そして二年目には、自身の地元でもあり、東京芸術劇場の立地する豊島区における劇場をテーマに研修に参加することとなりました。地域連携の事業に携わると共に、通年で鑑賞サポートの実務研修を受けることができました。

二年間の長期・多岐にわたった研修のため、印象に残ったエピソードを絞ることがとても難しいです。しかし、二年間の研修を通し、地域に根差した舞台芸術の活動がしたいと考えたことが、豊島区の財団への入団につながりました。財団に在籍していた5年間では、地域の方の文化活動を支援する様々な事業に携わるとともに、放課後にアーティストと子どもたちが会える事業の立ち上げなどを行っていきました。そして、同財団が運営する劇場の事業にもいくつか携わることができました。障害のあるアーティストとのクリエイションに参加し、約4年間に渡る日本・英国・バングラデシュの共同制作の現場、劇場の主催公演の観劇サポートの実施や、観劇サポート講座も担当してきました。東京芸術劇場での二年間で、興味を広げ研修を受けた結果、様々な現場で「働く」ことにつながっていったと実感しています。二年間に渡り、各実務研修でご指導いただきました事業担当者の皆様、日々の研修プログラムから様々な面までサポートいただいた本研修の担当者の皆様のおかげと心より感謝申し上げます。最後に改めて、アーツアカデミー10周年おめでとうございます。

アーツアカデミー研修を修了してから、もう7年ほど経過しましたが、研修内容が充実していたこともあってか、今でも当時の記憶が鮮明に残っています。現職についてちょうど5年というところですが、鑑賞事業、育成事業と幅広く事業を担当し、常にその根底にはアーツアカデミー研修での学びがあったと感じています。今回アーツアカデミー研修10周年記念冊子へ寄稿させていただくことで、当時の出来ごとを振り返る機会を得られたことに大変感謝しております。「アーツアカデミーと私」をテーマに、少し当時のことをお話できればと思います。

私は演奏家になることを目指しながら音楽大学に通っていましたが、在学中「音楽大学オーケストラ・フェスティバル」の企画で各大学から選出された裏方スタッフになったことをきっかけに、アーツマネジメントの世界に目を向けるようになりました。様々な裏方仕事をアルバイトとして経験し、もっと企画制作の最前線に身を置いて学びたいと考え、大学卒業後このアーツマネジメント研修に参加することを選んだのです。

研修に参加した当初、ここまで事業制作に深くかかわっていくとは想像もしていませんでした。以下私が関わらせていただいた事業について書いていくわけですが、「研修」という身分以上に企画制作の現場を知ることができるのは、この研修の大きな特徴だといえるかもしれません。

まず一つ目の事業は「芸劇ウインドオーケストラ・アカデミー（当時名称）」です。私が携わったのは創設から2年目の年でした。若手演奏者が職業演奏家として生きていくためのすべを学ぶアカデミーで、演奏技術の向上、フリーランスに必須の知識などを提供する事業です。私自身前述のとおり元は演奏家を目指していたわけで、アカデミーに参加する若手演奏者たちの気持ちや立場、苦悩などがよくわかるのです。「演奏家として生きていくんだ！」この覚悟を決めることは簡単なことではありません。そういった中で将来を見据えてアカデミーに参加した若手演奏者の手助けをしたい、そんな思いで頭がいっぱいでした。コンサートホールでのウインドオケとしての定期演奏会はもちろんのこと、豊島区内でたびたびアンサンブルによる出張演奏を行いました。出演者の選定、調整、現場アテンド、依頼側との打合せ、いろいろと走り回ったことを思い出します。演奏の機会を確保することは演奏家の成長にとっては非常に重要なことです。その一端を

担うことができたのは当時大きな収穫でした。当時のアカデミー生とは今でも現場でお会いする時があります。コンクールで優勝した人、オケのポストを獲得した人、活躍は様々ですが、そういったニュースを見ると嬉しくなります。現職では地元アーティストによるアウトリーチ事業を担当しています。新潟という土地で演奏家として食べていく覚悟を決めたアーティストのサポートは「芸劇ウインドオーケストラ・アカデミー」を経験した者として、大きなやりがいを感じます。公共ホールが地元のアーティストを支援する、これは大変意義深いものと感じていて、会館職員としてサポートを続けていければと考えております。

二つ目の事業は「東京芸術劇場開館25周年記念コンサート」です。タイトルからして通年の事業ではなく、特別な企画であることがわかるといえます。企画制作の「醍醐味」を味わうには十分な企画です。公演のプロデューサーに鈴木優人氏を迎えて行われました。すでに私がプロジェクトに加わった時点でおおよその方向性は決まっておりましたが、広報宣伝関連のこだわりや、アイデアマンであられるプロデューサーの要望に応えていくのは大変ながらも制作冥利に尽きる忙しさだったと振り返ります。そして当時メイン担当の係長のご心労を改めて察するところです。ハプニング、トラブルありつつもこの企画を成功で終われたことは大きな喜びでした。同時に、大きな現場の調整役としての制作担当の多岐にわたる仕事内容を目の当たりにし、大きな学びを得た機会になりました。鈴木優人氏とはこの企画で一緒にいて以来、現在もお会いすればお話をする関係になりました。こういったご縁が生まれるのも有難いことです。

最後に、アーツアカデミーの存在は、私にこの業界で必要とする最低限のスキルと有難いご縁を提供してくれた場であると総括しておきます。冒頭のとおり、この業界に興味はあれど無知であった私が、様々な体験をすることができました。座学のみでゼミなら、アーツアカデミーでなくとも受講できる機会はいくらでもあるでしょう。しかし、そうした座学では知ることのできない現場の動きや考え方、人間関係、ハプニングなど本物を知れたのはアーツアカデミーだからこそでした。これからも現場の最前線で活躍する人材が輩出されることを期待しながら、10周年記念冊子の寄稿とさせていただきます。



「アーツアカデミー研修と私」



「現場にいながら、思考を育てられる環境」

アーツアカデミー10周年おめでとうございます。アーツアカデミーなくしては、今の自分は存在し得ないといっても過言ではないほど、充実した研修期間を過ごさせていただきました。改めて御礼申し上げます。

私は大学時代、音楽大学でクラリネットを専攻しながら、高校2年生で立ち上げた自身のオーケストラの企画運営をしていました。大学卒業を目前に控えたタイミングで進路を悩みましたが、演奏ではなく、企画運営を生業とすることを決意しました。しかし、専門的な勉強をしておらず、アートマネジメントの「ア」の字も知らなかったため、大学卒業後に学べる場を探していたところ、アーツアカデミーを見つけました。知識、現場経験、業界関係者との繋がり全てに乏しい私にとって、プログラム内容が理想的なものであったため、応募をしました。

研修生時代に最も鍛えられたのは、人に伝わる文章を書くことです。出身大学では、卒業論文というものを書く必要がなかったため、文章を書く経験にも乏しく、月4本の週報、年12本の月報、年3本の研修報告書を完成させるために、当時の研修担当の方に叩き上げられました。また研修期間中に、演劇・ダンスといった別の分野の舞台芸術の公演を多く観劇できたため、自身の視野を拡げ、思考し、文章に落とし込むという習慣をつけることができました。奇しくも現在オペラや音楽を伴う舞踊作品などを担当していますが、企画立

案時や関係者とコミュニケーションをとる際、この時養った習慣が生きてきていると感じています。

研修期間で感じた「30年後に自分が企画制作する公演のチケットを買うのは誰か？」という危機感を抱きながら、一年の研修期間を終えると同時に東京芸術劇場の常勤職員となりました。当初は、研修生と職員のそれぞれの視点から見える景色の違いから、自分が抱く理想像を机上の空論にしないことの難しさに直面しました。しかし常勤職員となってからの6年間で、コンサートホール貸館担当(約3年)若手演奏家育成事業(4年) TACT フェスティバル音楽プログラム(3年)オペラシリーズ(4年)を担当し、様々な視点で「劇場」「文化」というものを捉えることができ、自分が継続的に取り組んでいきたいことが明確に見えてきました。これは、充実した研修期間に培われた素地あってこそだと、今振り返って感じています。

コロナ禍を経験し、人々の価値観が大きく変わった今、「劇場とは何か」「文化とは何か」「30年後、劇場がどうあってほしいか」「30年後の芸術を取り巻く環境がどうあってほしいか」を自問すべき時だと思います。これから研修を受けられる方には、自分がキャリアを重ねる上で道標となる北極星を見つける思考の時間として、アーツアカデミーの研修期間を目一杯生かしていただければと思います。

私は「劇場法」という言葉も聞いたこともなければ、「公共劇場」とは一体何なのかということも知らずに音楽制作のアーツアカデミー研修生になってしまった。

留学を終え、日本での活動について色々と模索しなければと思っていた矢先、たまたまある人から「平成28年度アーツアカデミー 東京芸術劇場プロフェッショナル人材養成研修」への応募を勧められたことが研修生になるきっかけだった。

研修生になる気はゼロだったが、運良く合格してしまい、一体自分がどこを目指しているのか迷子になりそうだったが、これも何かのチャンスだと思い一年間やってみようと思った。

音楽制作という全く知識のないジャンルに関する研修ではあったが、日本語が通じる環境に歓喜したのを覚えている。だがその一方で、せっかくフランスで取得した音楽家が音楽を教える国家資格「DUMI / デュミ」に関する活動からは遠のいてしまうのではないかと焦りもあった。

今思えば、このアーツアカデミー研修での経験は何も無駄なことではなく、むしろ大きな収穫しかなかったのだが、それに気づく前の私は、研修開始早々にかく広くて迷路の様な芸劇の館内が覚えられず、目指す場所に辿り着けないかもしれないという絶望感と緊張感がしばらくの間続いていた。

アーツアカデミー研修は、研修生ゼミ、実務研修、他館研修に加えて、週報、月報、報告書の執筆と盛りだくさんの内容だったが、館内で迷子になることはあっても、毎日楽しくのびのびと過ごしていた思い出しか出てこない。

特に週報、月報、報告書では、横堀応彦氏による明確な指摘と説明、的確な添削によって、崩壊していた日本語脳が修正され、私にも文章を書く力が少し身についたと思う。

アーツアカデミー研修中に、フランス音楽政策研究のスペシャリストである、武庫川女子大学 音楽学部 准教授の永島茜氏と知り合うことが出来た。

永島氏は著書『現代フランスの音楽事情』のなかで、日本

ではほとんど知られていないフランスの音楽家のための国家資格「DUMI / デュミ」について触れていたのである。このことを人材育成担当の方々に報告すると、「芸劇の研修生という立場を利用してすぐに大学に連絡してみるといい」と言ってくれたのだ。

更には永島氏を芸劇へお招きし、フランスの音楽政策やDUMI / デュミについて研修生ゼミを実施したり、私が武庫川女子大学でDUMI / デュミについて講演や実践をさせていただく貴重な機会を得ることができた。

このことがきっかけとなり、複数回に渡り大学へ招待していただいたり、DUMI / デュミに関する論文を共同で執筆するなど、今でも活動が続いている。

アーツアカデミー研修を修了して5年以上経つが、その間に業務委託で芸劇のいくつかの音楽制作、人材育成のプロジェクトに関わってきた。

「ボンクリ・フェス」ではDUMI / デュミの資格を活かして「子どもボンクリ」でファシリテーターの一人として、「劇場ツアー」では、制作の一方、音楽の知識を活かして主にコンサートホールのツアーガイドを勤めた。また、音楽事業の「ランチタイム・パイプオルガンコンサート」、「ナイトタイム・パイプオルガンコンサート」の視覚障害者のための公演説明会を不定期ではあるが担当している。

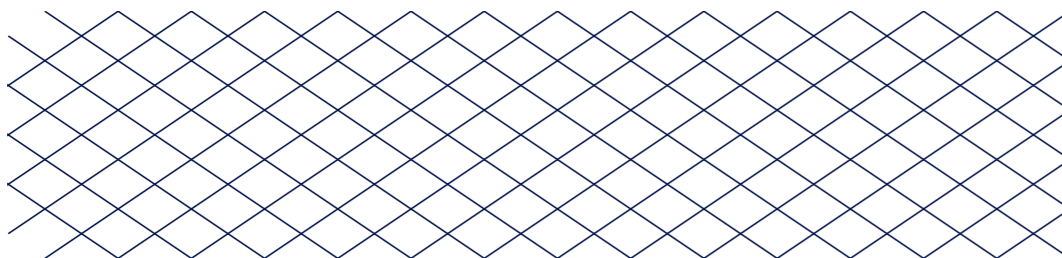
現在の主な活動は、私立関東学院小学校において、音楽の特別講師(DUMISTE / デュミスト*)として、全学年を対象に、音楽コンサートを楽しく鑑賞することを目的とした授業を担当している。

これはDUMISTE / デュミストが日本の教育機関で連続して音楽の授業を実施する初めての例となる。

アーツアカデミー研修修了以降、どこにも就職せずにフラフラと数年過ごしてきてしまったが、ようやく思い描いていた自分のスキルを存分に発揮できる理想的な実践の場が一つ出来たのかもしれない。

* DUMI / デュミ資格保有者のことをDUMISTE / デュミストと呼ぶ

「アーツアカデミー研修と私」





「アーツアカデミー研修と私」

研修に参加する以前、東京芸術劇場は、観劇や演技のワークショップなどで時々行く機会のある（役者をしていました）、どちらかと言えば馴染みのある場所だったのですが、こういった研修制度があることは全く知りませんでした。それどころか、人材育成部門というところがあることも、そこがどういふことをしているのかもほとんど分かっていなかったと思います。劇場はあくまで観劇する場所、そして時々とても質の高いワークショップを、商売本位でなく企画してくれる親切なところ、勝手に味方のように認識していたのに、その内実に、少しも興味を持っていなかったなあ、と今になって思います。

そんな私ですが、2016年11月に東京芸術劇場で実施された「英国オールド・ヴィック劇場 社会の課題に向き合う演劇ワークショップ&レクチャー」に参加したことで、人材育成部門の人達と少し繋がりができます。これは、単に演技のスキルアップを目的としたものではなく、子供達や何かしらのサポートを必要としている若者達を対象とした支援教育の一環に、演劇などのパフォーマンスアーツを取り入れた英国の試みを紹介し体験する、という趣旨のものでした。ちょっとした興味本位で私はそのワークショップに参加したのですが、社会の中で生きることの困難を感じている人達に向き合おうとする、二人の英国人講師の熱意に大きなショックを受けます。二人は私よりもいくつかな下でした。

彼らに触発されて「何かせねば」という気になった私は、役者の傍ら介護職として働いていた特別養護老人ホームの施設長に、「演劇を使った利用者（お爺さんお婆さん達）向けのレクリエーションをやらせてくれないか」と話しをしに行き、彼は快諾してくれます。ワークショップの参加者達に連絡して、一緒にやってくれる人を募ると、すぐに何人もの人達が手を上げてくれました。こうして月に一度、演劇を使ったレクリエーションを老人ホームで実施することになり、その経過をワークショップ参加者で共有するフェイスブックのグループページに載せたことで、人材育成部門の田室さんと何度か話す機会もでき、「こういう研修制度があるよ」と紹介していただくことにもなりました。

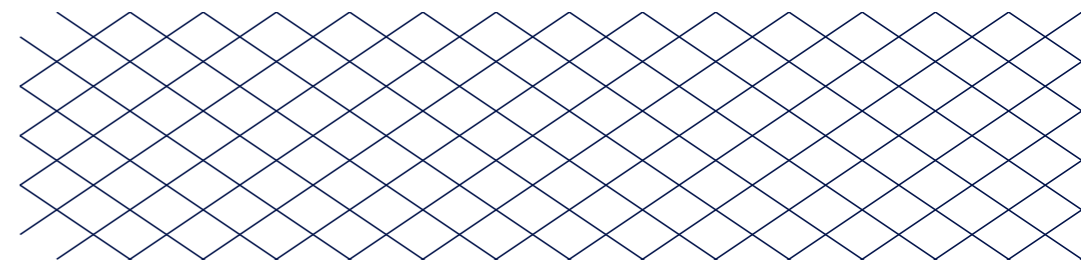
研修に参加してみたいと思った理由も、やはり「何かせねば」でした。英国人の二人の講師同様、劇場関係の人達、それからそのワークショップの参加者や老人ホームのレクリエーションに来てくれた人達も多くが熱意の人達でした。その人達に接するたびに、「何かせねば」という思いだけが膨らんでいったのだと思います。しかし、自分の知識と実務経験

はあまりに乏しいということも、短い研修期間中何度も思い知らされます。いくつものレクチャーや講義を受けさせていただきました。どれもとても質の高いものばかりで、知らないことだらけの私はいつでも小学生に戻ったような気がしたものです。三十代も半ばを過ぎて、そんな感覚を持つのは嬉しかったのですが、不安にもなります。毎回のレポート提出もそうです。大学に行かなかった私はレポートというものを書いたことがありませんでした。それが週報、月報、それから最後に出す研修の総まとめの報告書。レポートとは何ぞや、から始まり、パソコンの使い方、言葉の使い方、要点のまとめ方などを何度もお聞きし、ご指導くださった方々を呆れさせたこともきっと多かつただろうと思います。

演劇ワークショップの制作の手伝いもさせていただきましたし、先の「社会の課題に向き合う演劇ワークショップ」の2017年度版も付きっきりで見せていただきました。講師達に再会できたのも嬉しかったし、彼らとは岐阜県可児市で行われた海外ルーツの若者達とのワークショップにも同行させてもらい、サポート要員としてワークショップに参加することも出来ました。

私の研修期間は、最後の報告書を仕上げる期間を除けば、わずか三か月ほどの短いものでしたが、なんと多くの、そして多彩な研修プログラムが用意されていたことかと驚きます。そしてその多彩さが劇場でもあるのです。単に演劇、ダンス、音楽の鑑賞の場としてだけではなく、各種レクチャーやシンポジウムが行われており、書道やアート作品の展示がある。多彩で多様な人達が集う場としての機能、それがとても魅力的でした。できることなら、ここで仕事をしてみたいとも思いました。

ちなみに研修後のキャリアということについても、ほんとうに親身になって相談にのっていただきましたが、私自身の適性が、ということもあり、劇場関係の仕事に就くことはできませんでした。ただ、短い研修期間中にいただいたたくさん、あるいは大きな一つの宿題がまだ自分の中にしっかりと残っているのを感じています。それを、何かの形にしていかなければ、というのが今の個人的な課題にもなっているようです。私が受けた短い研修は、単に劇場関係者を育成するためばかりのものではなく、もっと深く、一社会人、一人の人間としての成長、育成に届くものであったように思います。改めて、こういう機会を与えて下さったことに心からの感謝を感じています。



◆研修に参加した理由

学生時代に演劇サークル、大学卒業後は民間企業に就職し、イベント制作や舞台・ショー公演の企画制作を行っており、様々な公演を観たり企画していく中で、“劇場”という空間の特異性とそれを主軸としたアートマネジメントに興味を持つようになりました。作品単一の視点でしかそれまで演劇について考えたことはなかったのですが、劇場と地域社会の関わりといった、より広い視点での演劇やアートのあり方についてももっと学びたいという想いが強くなり、一念発起して会社を退職、アーツアカデミーに応募しました。

◆研修中、印象に残っていること

「リロ・パウアーによる俳優・ダンサーのためのワークショップ」(平成29年12月2日～22日)は本当に衝撃的で、「アーツアカデミーに参加したのは、この時の為だったのか」と思えるほど、自分の人生にとってとてもとても素晴らしい体験をさせていただきました。

講師であるリロ・パウアー氏のファシリテート力、参加者の内包するものを引き出す力、それを組み合わせて次のステップへ繋げる昇華力……。毎日参加者たちから新しい発想や表現が生まれ、それを全員で共有していくあの空間は、常に驚きに溢れていました。

そして何よりも「リロ・パウアー」という、彼女自身の人

間力に私自身魅了され、なんと優しく、なんと大きな愛を持った人間なのだろうと、ただただ彼女の考え方や人間性に深く感銘を受ける毎日でした。

たった20日間という期間でしたが、彼女との出会いが、自分の人生にとって、間違いなく大きなターニングポイントだったと、今でも強く感じています。

また『リチャード三世』の制作に関わらせていただいたことも、非常に大きな経験でした。シルヴィウ・ブルカレーテ氏の演出は、これまで自分が観てきたどの『リチャード三世』とも異なり、一級の演出家の持つ世界観や視点を間近で観ることができたのはまたとない経験で、それを体現していく出演者たちの表現力もまた、日々圧倒されるばかりでした。

◆当時の自分に言葉をかけるとしたら……

会社を辞めて飛び込んだ舞台芸術の世界。時には悩んだり、決断を後悔しそうになったり、楽しいことばかりではないだろうと思います。

ですが、それ以上に大きな出会いと喜び。そして何よりも人生を変える出会いがあります。心から尊敬できる人との出会いがあり、深く感動に包まれることもあります。

1年というあっという間の研修期間ですが、その1年は人生の大きな財産になり、何にも変え難い経験を得ることができますので、自信を持って頑張ってください。

「飛び込んだ先に」

5期



短期コース 教育普及分野

山際真奈 Mana Yamagiwa

東京国立近代美術館企画課教育普及室 研究員

「芸術を通じた出会いと学びの出発点」

美術館の教育普及事業に携わっている私にとって、アーツアカデミー研修は現在の仕事の出発点ともなった場所でした。初めて実際の教育普及現場に触れる中で、文化施設と多様な人々をつなぐという事業の使命・役割を肌身で実感し、熱意を持った職員やアーティストとの出会いは自分自身の進む道を決める後押しにもなったように思います。

研修参加時の私は、大学院への進学を控えていましたが、卒業後の芸術文化領域での仕事については具体的なイメージを持っていませんでした。そんな中で参加したアーツアカデミー研修は、現場での実地研修はもちろんのこと、様々な文化施設への訪問や、大学講師や専門家、外部講師によるレクチャー等、実践と理論の両面がバランスよく取り入れられており、文化施設の事業内容だけでなく、事業を取り巻く背景や、業界全体の動向についても学ぶことができました。それら全ての経験や出会いが、現在の仕事の糧ともなっているように感じます。

特に、教育普及事業の社会包摂的な役割を基調とするプログラム構成となっていたことは、アーツアカデミー研修ならではの先駆的な内容でした。英国のシアターカンパニー、フランティック・アセンブリーを講師としたプログラムでは、日本語を得意としない海外ルーツの子供たちや、知的障害の

ある参加者を対象とした演劇ワークショップに参加させていただき、演劇やアートの魅力と可能性を全身で実感したことを鮮明に覚えています。他者と本当に出会うことの難しさや面白みを、心から実感し表現を続けるアーティストとの出会いや語らいの機会は、かけがえのない時間でした。

アーツアカデミー修了後、大学院ではカルチュラルスタディーズを軸に美術史や芸術哲学を学び、離島的美術館を経て、国立新美術館、東京国立近代美術館で教育普及事業に携わることとなりました。劇場とは性質の異なる美術館ではありますが、教育普及という分野の根幹にある、アートを介して多様な人々が出会うことのできる場づくりや、社会包摂の視点は共通であると感じています。

その意味で、アーツアカデミー研修によって培うことのできた知見や態度、人との出会いは、今でも日々の仕事の糧となり、原動力ともなっています。(リロ・パウアー氏のワークショップの残像と共に、ストレスが溜まるとよくガチョウになったりしています。) 何より、常に誠実に仕事への姿勢や想いを伝えてくださった担当職員の皆様をはじめ、研修に関わってくださったすべての皆様に感謝でいっぱいです。これからも、アートと人、表現や対話、遊びの中で、静かに逸脱する場づくりに関わり続けていきたいと思っています。

私は社会人となつてからずっとアマチュアの劇団に所属し、俳優や裏方スタッフを経験しながら演劇活動を続けていました。従って、長い間劇場を「利用する」立場の人間でした。仲間と表現することが楽しくて、自分の表現を追求することに重きをおいて活動をしていたので、劇場という場について深く考えたことはなく、ましてやそこで働くという選択肢は全くありませんでした。そんな私が劇団の制作事務や、他団体の人達と企画制作をするようになり、地域の演劇や舞台芸術を俯瞰して見る事が出来るようになった時に会ったのが、アーツアカデミーでした。演劇や芸術についてきちんと学んだ経験もない中、舞台芸術にじっくり向き合える仕事に携わりたい、という漫然とした思いを抱き始めた私にとって、アーツアカデミー研修は希望であり、大きな転機を与えてくれました。応募時の年齢が40歳。応募条件の対象年齢を少しばかり超えていた私を選んでくださった、当時の副館長を始め、担当の方々には感謝しかありません。自分より10歳以上も年下の、優秀で頼りがいのある同期生と共に、東京芸術劇場でオリエンテーションを受けた時に抱いた、いつか劇場や舞台芸術を通して何かを選べるようになりたい、という思いは今でも変わりません。

研修生の1年間は本当に充実しており、贅沢な時間でした。常に劇場という空間の中で様々な芸術に触れ、それを支える

多くの人々の表裏を垣間見、体験することが出来ました。また、研修期間の終盤はコロナ禍と重なり、徐々に悪化していく非常事態をいかに乗り越えていくのか、劇場の危機管理体制や情報収集の大切さを目の当たりにし、今後に繋がる貴重な経験をさせていただきました。地方出身の私にとって、やはり東京は人も情報量も多く、その上情勢の変化も早い。この環境の違いや芸術に対する人々の意識・感度の差、劇場の在り方等を肌で感じ、改めて地方の良さも知る事が出来ましたし、地方だからこそその強み、劇場の役割があることに気付くことが出来ました。研修前には漠然としていた目標も、1年間じっくり学び、どっぷりと舞台芸術や劇場事業(私の場合は社会共生事業でした)に携わることで、自分のやりたいことと、何故この歳になって新たな道へ進みたいと思ったのか、その答えもいくつか見つけました。まだまだ道半ばではありますが、長年住み慣れた地へ再び戻り、来年開館する新しい劇場に勤めながら、日々目標に向けて奮闘しています。

最後に、芸術アーツアカデミー研修が10周年を迎えられたこと、またその内の1年間に研修生として関わることが出来たことを、大変嬉しく思っております。多忙な劇場業務の中、毎年入れ替わる研修生を受け入れ続けてこられた劇場職員及び担当の方々に改めて感謝申し上げます。この学びの場が、今後も末永く続くことを心より願っております。

7期



長期コース 教育普及分野

藤澤祐子 Yuko Fujisawa

岡山芸術創造劇場

「アーツアカデミーを経て」



松岡大貴 Taiki Matsuoka

豊岡演劇祭 2022 プロデューサー、コーディネーター / 一般社団法人 COs 代表理事

「次の10年を希望する嘆願書」

元々は大学院で演劇史を研究する側、芸団協でインターン等をしていました。だんだんと舞台芸術の創造環境に関心を抱き都内の公共ホールに就職しました。

数年勤めて劇場運営の様々な課題を感じて、より専門的にアートマネジメントや舞台芸術の創造環境を考えたいと思うようになりアーツアカデミーに応募しました。アーツアカデミーの存在を知ったのは、自分が勤務していたホールへ送られてきたアーツアカデミーのチラシをラックに配架しようとした時にふと気になり、そのまま自分が持って帰りました。

アーツアカデミーでは自分が感じていた、そして考えていた課題や障壁に立ち向かう武器を得られたと思っています。座学/実務の両面とも、本やネットで得られるような知識だけでなく、実際に自分と同じように様々な課題意識を持ち、それを乗り越えようと考え取り組んできた先輩たちと語る場があることは貴重な経験となっています。同期との繋がりもあり、自分の同期は皆さん優秀で、気軽に連絡できるのは得難い繋がりだと思っています。各劇場や団体の偉い方々とも、何となく知り合いになれるのは挨拶するときに微妙に助かりました。

研修修了後は都内の劇場に就職しようと思っていたのですが、ちょうど兵庫県豊岡市で豊岡演劇祭の立ち上げの話があり、事務局に応募したところご採用頂きました。都内の劇場も良いところまで進んでいたのが悩んでいたのですが、当時の高萩副館長と田室係長から、絶対とは言わないまでもどう考えても演劇祭の立ち上げだろうという圧力を感じて、豊岡を選びました。豊岡演劇祭 2020 においてコーディネーター、豊岡演劇祭 2021 でアソシエイトプロデューサー、本年度よりプロデューサーを務めております。

現在の仕事はプロデューサー/コーディネーターとして主にフリンジ/地域連携プログラムの統括と、公式プログラムの一部事業を担当しております。プロデューサー陣の若手組として、数えるほどとする事業数をお任せ頂き、心から、大変、やりがいと青春を感じております。本当です。ほんとうに。

研修中の自分も研修前の自分も、そして今の自分も、様々

に立ち向かうための手段や経験、立場は違うかもしれませんが、本質的に考えている事は変わらない気がしています。何かを表現したいと思う人が、それを創造し発表する場をどう担保していくのか、答えの出ない中で模索しています。それはアーティストに限った話ではなく、多くの舞台芸術に携わるスタッフにとって切実な、経済的、環境的、物理的等々多くの課題として眼前にあるものばかりです。それを一つずつ解決し、あるいは解決しなくても良い方法を考える事こそが今のアートマネージャーやプロデューサー、そして自分に課せられている事なのだと考えています。

昔は「制作」と呼ばれていた役割はとても多様化し、求められるものに応じてより芸術面に、より実務的に、横断や細分化していくのだと思います。僕も今の自分の役割を「制作」業務とだけ位置付けてはいません。コミュニティと結びつけた新たなフェスティバルを模索しているこの数年間は、自分にとっての演劇活動であり、芸術活動であり、表現の手段でもあります。

アーツアカデミーの事業は、一義的にはアートマネジメントや劇場/組織運営を学ぶ場であると思いますが、その先にあるものは人によってとても多様で、文字通り無限のグラデーションがあると思います。その多様な人々がいる事の価値は、これまでに、そして現在アーツアカデミー研修に取り組んでいる皆さんによって証明されるはずで

自分自身は、このアーツアカデミー、そして東京芸術劇場出身であることを誇りに思っています。これからもパフォーマンスアーツの分野でアートマネジメントを志向する人々にとって、東京芸術劇場研修生が一つの入り口になるような、きっかけとなるような、憧れになるような場所であることを希望します。

最後になりますが10周年記念冊子の発刊を心からお祝い申し上げます。この10年で紡がれた様々な人や出会いが、今後の舞台芸術及び多様な表現の場を支えることを確信致しております。この事業を続けてこられたアーツカウンシル東京及び東京芸術劇場、特に人材育成担当の皆様へ心から敬意を表します。

最初に東京芸術劇場でのアーツアカデミー研修の存在を知ったのは、SNSにてふと研修生募集告知を見かけたことがきっかけだったかと思います。当時私は別業種の会社員を辞め、劇団にて制作に打ち込んでいたところでした。子どもの頃から舞台芸術を観るのが何より好きで、その描き出す世界にいつも支えられてきたからには、いつか、自分もその一助になりたいという思いこそあったものの、その業界で仕事をするイメージを長らく掴めず、ただ趣味として劇場に足を運ぶ日々が続いていました。それまではずいぶん長い間、「仕事は仕事、趣味は趣味」という観念に縛られていたことを思い起こします。当然、仕事と趣味それぞれを切り替えて充実した生活を送っている人たちは沢山いるものですが、私の場合は自分の最たる関心事と従事する仕事と食い違っていることに早々に耐えられなくなってしまい、数年の迷走を経て劇団に辿り着いていました。

その劇団での仕事を通して「今後もずっと舞台芸術に関わる仕事をしていきたい」という思いを新たにしていたところから臨んだ東京芸術劇場のアーツアカデミー研修は、まさに「芸術文化の世界でどのようなキャリアを築いていくか」にフォーカスされたもので、自分の視野を格段に広めてくれた1年間となりました。

研修では演劇制作分野にて、特に関心のあった海外招聘事業に多く携わらせていただき、一つの公演が企画から実現に至るまでのダイナミクスに大いに圧倒されたことを覚えています。研修中に数か月間（事業自体は数年前から進行していますが）準備を一緒にした公演に向けてアーティストが来日、眼前の舞台上で作品が立ち上がっていき、いよいよ初日の幕が開いたその瞬間の感銘は、やはり今現在やこれからも仕事の

原動力であり続けていくと思います。また劇場という場だからこそ、制作のみならずアーティスト、テクニカル、広報票券、教育普及、総務経理から劇場案内まで、それぞれ多彩な専門性で事業に携わっている方々を日常的に目の当たりにできたことが、キャリアについて考える上でも本当に貴重な時間でした。また貸館業務研修は比較的短い期間ながら、年間を通して数多の劇場利用団体、申請団体と関わり合う業務の一端を垣間見ることができ、ここにもまた劇場の在り方をデザインする醍醐味を感じました。

私の在籍していた2019年度は長期研修4人で約1年を過ごしましたが、それぞれ研修配置の異なる同期たちとお互い日々考えたことを話し、また座学を共にできたことも本当に学び深く、常に見守ってくださった人材育成担当の方々を含め、本当に良いご縁に恵まれたことを有り難く思っています。

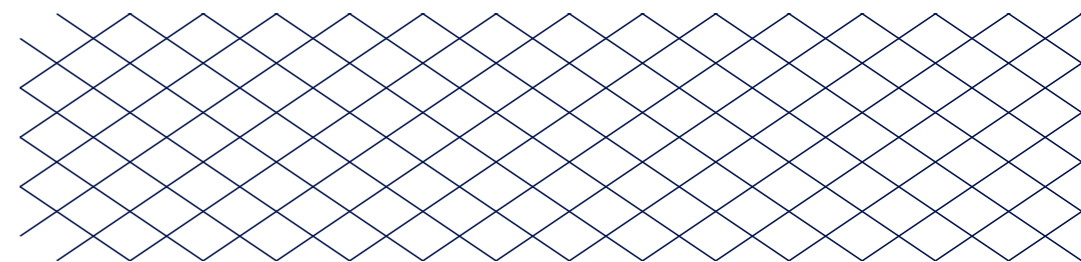
現在は独立行政法人国際交流基金の文化事業部 舞台芸術チームにて、舞台芸術作品の国際共同制作や、コロナ禍で始まった海外向けオンライン配信事業等に携わっています。研修時代に基金の事業に立ち会っていたことも、現在の仕事に興味を持った契機の一つでした。今は劇場という創造の現場の熱気が恋しくなることも多々ありつつ、また研修中に折々耳にした舞台芸術業界全体の抱える課題など実感することもありつつ、しかしそれらも含め、掛け値なしに自分がやり甲斐を持って打ち込める仕事をさせていただいていることを日々感じています。

アーツアカデミー研修は今年で10周年を数えるとのこと、今後も多くの方々がこの研修を通してご自身の道を切り拓かれることを、心より祈っています。



結城ゆりえ Yurie Yuki

「アーツアカデミー研修10周年に寄せて」





「アーツアカデミー研修と私」

研修に参加するまで、私は都内のダンスカンパニーで障害のある人たちとのパフォーマンスづくりや一般の人たちに向けたワークショップのアシスタントなどを行っていた。ダンサーやアーティストではない一般の参加者たちが表現に向き合い、個性を輝かせている瞬間に立ち会いながら、漠然と「良いことをしている」と思いながら活動していた。

その一方で、ワークショップに来る人の固定化や社会への波及などを考えたときに、このままでよいのか疑問に思った。周囲の社会包摂的な活動を行うアーティストを見ても、「良いことをしている」はずなのに生活が困窮する人や、スキルを持ちながらも様々な事情により活動から退く人が多いと感じた。同時に、自分のこれからの活動に対しても不安を抱き、視点を変えないといけないと感じ、友人から紹介してもらったのがアーツアカデミー事業の「東京芸術劇場 プロフェッショナル人材養成研修」であった。

東京芸術劇場では2019年度から障害の有無などに関わらず、あらゆる人とダンスを行う東京のはら表現部という事業が立ち上がった。また翌2020年に開催される東京パラリンピックに合わせて、海外のアーティストを招聘して障害のある人ともに作品創作を行う公演事業の準備も始まっていた。共生社会の実現に向けた機運が高まる中で、公共劇場が行う障害のある人との事業はどういったものであるのか、劇場と社会がどのような接点を持っているのかを学びたいと思い、アーツアカデミー研修の参加を希望した。しかし、第8期生が研修を開始する予定であった2020年4月は新型コロナウイルス感染症拡大のため、緊急事態宣言が発令された直後で、東京芸術劇場も休館となった。事業の多くが中止、延期となるなか、海外アーティストとの公演事業も渡航が出来ずに中止となった。東京のはら表現部については、オンラインでの活動に切り替えて事業継続を行っていた。

ただ、事業数は減っていたものの、人材育成担当の方々がゼミなど増やし、学びの機会を多く与えてもらったことは非常に感謝している。この時お世話になった方々には今でもあらゆる場面でお世話になり続けている。加えて、コロナ禍ということもあり、他県との往来が難しい中オンラインを通じて、報告書作成のためのインタビューをさせてもらったこと

も大きな糧となった。他の地域で行われている障害のある人とのパフォーマンス事業はどのように運営されており、関係機関とどのような連携をしていたのか等、この時伺えたお話は今でも参考にしている。

研修終了後は研修生時代から業務に就かせていただいた、社会共生担当の業務委託として働きながら、地元である宮崎県の劇場と一緒に過疎地域の子供たちとの作品創作のプロジェクトなどを行っている。社会共生担当の業務やその他のプロジェクトに携わる中で、研修前と今の自分を比較すると違っている部分も多く実感する。一つ例を挙げると、研修前だったらワークショップの参加者との関係性の構築など現場のことだけを考えていた。今は現場外のことまで目を向けるようになった。障害のある人との事業に限らず、社会包摂的な活動は劇場や芸術団体以外の関係機関との連携が必要不可欠だ。そういった人たちとどのように協力することで、持続的に発展させることが出来るかを考えながら事業を行えるようになったのは、アーツアカデミーで学べたからこそだと実感している。

研修前の自分に声をかけるのであれば、「研修を受けることが出来て、よかった」と言うだろう。上述したように、今お世話になっている人とのつながりや自分自身の学びはアーツアカデミーで学んだことがベースになっている。その人脈と学びを築くことが出来たのは、根気強く見守っていただいた人材育成担当と実務研修を受け入れてくださった社会共生担当の皆様のおかげだ。在籍期間中は迷惑ばかりかけて、今思い出しても申し訳なさや恥ずかしさでいっぱいになるが、お世話になった方々に感謝し、これからも様々なプロジェクトに向き合っていきたい。

最後に、私が研修を受けた2020年は、舞台芸術は「不要不急」と言われた年でもあり、舞台芸術と社会の関わりが大きく見直された時期ではないかと私は考えている。その中で本事業が2013年から「公共」の意識を持ちながら人材を育成し続けたことはとても意義深い。本事業が10周年を迎えたことを心からお祝い申し上げますとともに、これからも社会と舞台芸術を結び、双方の発展に寄与する人材を輩出し続けることを切に願う。

正直に言うと、研修を志望しながらも、特別「制作」という仕事に関心があったわけではなく、現在も公立文化施設に勤務していますが、ごく普通の事務職員として業務にあたり、そこそこ居心地よく働いています。

そもそも私は、幼少よりピアノを始め、音楽大学を経て、演奏活動しながら中学・高等学校の教育現場にも立っていましたが、演奏家としての区切りを感じたタイミングで真剣にキャリアチェンジを考えるようになりました。教員の仕事に面白味を感じつつも、音楽、とりわけクラシック音楽への愛着を感じながら働ける環境を考えた時に、初めてホールでの仕事というものが選択肢にあり、採用情報を探している中でアーツアカデミーを発見しました。転職活動をする中で、都郊外のホールで内定をいただいていたが、やはり芸術文化の発信源は中央ではないかという考えが頭にあったため、あえて東京芸術劇場という環境を選択し、新型コロナウイルスの感染拡大を横目に研修を受けることを決意しました。

最初の緊急事態宣言が発出された2020年4月、東京芸術劇場も休館を余儀なくされる中、リモートでゼミを受けるような形で研修が始まりました。研修中はあまりピアノも弾かず、講義や文献、現場での実務研修を通して、制作という仕事についてふわふわと考えながら過ごしていましたが、音も鳴らさずに音楽について考えるというその距離感は、自分にとって音楽との新しい関係性を意識させるものがありました。クラシック音楽を専門にしている人、特に多くの音大生は、音楽への愛着を以て学びを深め、音楽がもたらす豊かさを感じつつも、世間からのクラシック音楽へのニーズがとても限られたものであることを常にどこかで感じているように思います。しかしながら、演奏することから離れ、いざ劇場の中に入ってみると、劇場が想像以上に主体性を持って事業

を実施していることや、公演制作のみならず、人材育成や教育普及など、多様に展開している事業の多くに税金が投じられていることが視えてきます。社会が税金を投じて事業を動かすその構図は、世間から隔絶されていると思っていたクラシック音楽の社会的価値を体現しているかのようでもあり、展開されている事業の多様さから、社会が求める音楽の役割もまた多様であることを発見する機会となりました。音楽の社会的価値という視点は、私にとってアーツアカデミー研修で得られた今後の学びです。

現在、公立文化施設の事務職員として事業の進行管理に携わる中で、様々な事業を眺めながら、引き続き音楽の役割とその可能性について、ふわふわと考えながら過ごしています。研修中、実務研修として携わった制作現場では、演奏家とは違う新しい形で音楽に関わることができ、とても有意義な経験となりましたが、「よほど好きじゃないと制作は続けられない」という言葉を耳にするほど、担当者が業務に追われている現状も垣間見えました。私は音楽が「よほど」好きですが、音楽の社会的価値を考えていくために、今はあえて専門性に没入しない距離感で働いてみたいなと思っています。御陰様で、今もクラシック音楽への愛着は変わらず、日々事務仕事をこなす心穏やかな日々です。

制作者を育成するアーツアカデミー研修を経て事務職員となった私ですが、音も鳴らさず、制作現場にも携わらないからこそ視えること、できることがあるのではないかも思っています。音楽を眺めるという立ち位置を知り、音楽と新たな関係性を構築できたことは、紛れもなく私にとって良いキャリアチェンジとなりました。この先もアーツアカデミー研修が、このような示唆をもたらす場として研修生の糧となることを願っています。

「音楽を眺める仕事」



「研修から半年が経過して」

筆者が本研修制度に参加を決めた理由は2つある。1つは、東京芸術劇場という国内でも最大規模の劇場・音楽ホールにおける運営方法や業務内容を知り、自らの知見を広げるといふ目的である。筆者は、東京都内の公共ホールにて舞台管理業務を担っており、研修での学びが実務に還元されることを期待していた。

もう1つは、「文化芸術」というキーワードに関する考察を深める目的である。2020年以降、Covid19の流行により、文化芸術を取り巻く環境が一変した。筆者は、所属するポピュラー音楽学会で立ち上がった研究プロジェクト「新型コロナウイルスと音楽産業 JASPM 緊急調査プロジェクト 2020」*1に参画し、コロナ渦での補助金や助成金制度の調査を行った*2。そして、同年12月にはオンラインシンポジウムに登壇し、ポピュラー音楽を取り巻く文化助成についての発表を行った。文化芸術の発信拠点である公共劇場の考え方を現場で学ぶことで、リサーチを続けるヒントを獲得することも狙いであった。

劇場運営における実務の取得と、公共劇場における文化芸術の捉え方についての考察という2つのテーマを研修目的として自らに課した。

筆者の研修期間は2021年12月～翌2月までの3カ月間であり、内容はコンサートホールにおける貸館業務であった。研修期間のうち最も参考になった内容は、やはり現場の実務を経験できたという点である。東京芸術劇場は長らく東京都歴史文化財団が指定管理者を努めており、少なくともコンサートホールの貸館業務については、多大な運営のノウハウが蓄積されている。劇場の業務内容は属人化しやすい傾向にあるが、言語化されたコンサートホールの運営マニュアルによって、業務がどのようなフローで行われているのかを誰でも把握することが可能であった。これらを実際に見ることができたのは貴重な経験であり、自身の業務に還元できることは大変にありがたい。また、研修中に得られた人脈についても、現在の業務に大いに役立っている。

一方で、研修中に感じた多数の疑問点も存在する。本研修制度は舞台芸術分野へのキャリアチェンジに資することを目的の一つとしている。しかし、これらは東京都歴史文化財団が主催する事業の一環であるため、財源は税金である。そのため、受講生が民間の事業会社にキャリアチェンジすることが研修制度の成果として挙げられることは疑問である。なぜなら、営利目的の事業会社は、独自に人材育成を行わなければならないはずだからである。その人材育成を公共劇場が担うのであれば、企業側も費用を負担するべきではないだろうか。文化芸術活動、及び文化事業とされる領域において事業を行う営利法人と公共劇場の関係性については、議論の余地があるだろう。

また、現場での実務を熟すことのできる人材を育成するという内容に加えて、一人の人間としてのキャリア形成を助長するために、キャリアマネジメントのカリキュラムが組まれていると、研修の密度がさらに向上すると感じた。

筆者は研修修了後に、学生時代から繋がりのあるジャズミュージシャンと協力して、一般社団法人を立ち上げた*3。ミュージシャンの社会参画を推進していくこと、およびビッグバンドジャズを舞台芸術に昇華させることを目的に活動を行っている。今後は教育普及活動にも力を入れていきたい。豊島区西池袋で育った筆者にとって、東京芸術劇場は大変に馴染みのあるホールである。改修工事前の大ホールに続く長いエスカレーターや、2階から地下に向かって滝が流れていたことも懐かしい。このような劇場で研修を受けられたことは光栄である。今後は実務を行いながら、文化芸術というキーワードについてアカデミックな知見も広げていきたい。

*1：日本ポピュラー音楽学会「新型コロナウイルスと音楽産業 JASPM 緊急調査プロジェクト 2020」のお知らせ
<https://www.jaspm.jp/?p=3118> (2022年8月24日最終閲覧)

*2：オンラインワークショップ「ポピュラー音楽と文化助成～COVID-19による影響」(2020年12月20日開催) 文字版
<https://covid19.jaspm.jp/archives/1917> (2022年8月24日最終閲覧)

*3：一般社団法人 Jazz Arts Ensemble of Tokyo
<https://jazzartsensembleoftokyo.org/>

アーツアカデミーには1年と半年ほど在籍させていただきました。1年目は、それまで経験してきた制作の仕事をも一度学び直すつもりで演劇制作分野の研修を受け、1年目の第3タームから、舞台芸術をより多くの人に広げていく取り組みに関心を持ち、教育普及分野に移りました。途中で広報営業係のお仕事にも少し関わらせていただくなど、多くの部署の仕事について学べたことは、自分のキャリアを考える上でとても重要な経験となりました。職員の皆さまは、研修生の私たちに快く受け入れてくださり、公共劇場で働くとはどういうことか、何が課題で、どのように解決していきたいと考えているか、言葉を尽くしてご教示くださいました。時には研修生がどう考えているのかを知りたいと意見を求められることもあり、その信頼をととてもありがたく感じました。

1年目の第1タームでは、主催事業である「芸劇 eyes 番外編 vol.3『もしもし、こちら弱い派 ーかそけき声を聴くためにー』弱さを肯定する社会へ、演劇からの応答」に携わらせていただきました。自分と同じく「若手」と形容される3組の演劇集団の今後に繋がる公演になればと、当日パンフレットや広報業務を工夫する作業はとて楽しくやがいに満ちており、企画コーディネーターの徳永京子さんの考えるコンセプトや、作品一つひとつの魅力が伝わるように努めました。

第2ターム目は貸館業務に就かせていただきました。前職では劇場を借りる側の立場だったため、全く反対の立場から物事を見るという貴重な経験でした。様々な目的と表現方法を持つ利用団体に加え、舞台を管理する明治座、観客案内を務めるヴォートル、バーカウンターを営業するダイナック、清掃、警備、施設管理等の方々と間近で働くことで、劇場に携わる人の多様さを実感しました。そうした大勢の多様な人たちと関わる上で、担当者が芯を持ってブレないことの大切さも教わりました。

第3タームでは、教育普及分野である劇場ツアーのお仕事を体験し、チラシのリニューアルにチャレンジさせていただきました。並行して、劇場の広報誌 BUZZ の編集業務にも関わったことで、事業の広報と劇場全体の広報について比較して考えを巡らせることができました。この辺りで、自分これまで舞台制作として仕事を続けてきたものの、本当に興味があるのはやはり、舞台芸術をより多くの人に届けることではないか、という考えが強くなっていきました。

2年目の第1タームは社会共生意業の鑑賞サポート、東京のはら表現部、社会共生セミナー、多文化共生事業である東京影絵クラブ、そしてアーツアカデミー10周年と、盛りだくさんの内容でした。舞台芸術を広げていく試みのうち、広報とはまた異なるアプローチになるのが、舞台芸術がこれまで届けることができていなかった人々へ経済的、文化的、身体的な要因など、何らかの理由で劇場に来ることが叶わなかった人々に舞台芸術を届けるというもので、東京芸術劇場の中でこうした取り組みを行っているのが社会共生意業と多文化共生事業でした。そして、この分野の事業がそれまで経験した劇場のあらゆる事業と異なっていたのは、舞台芸術や表現活動の場を通して社会的課題の解消を目指すという点でした。

私はこれまで、社会的課題を解決するのは、選ばれた一部の人が行う政治や研究・開発などの力だと思っていました。舞台芸術はあくまで束の間の現実逃避で、実際に現実の課題を解決することはできないと勝手に決めてしまっていたのです。けれど、思い返せば私自身が社会的課題とされる問題のもとで苦しんでいたとき、ほんとうに救いになったのは舞台芸術の存在でした。舞台芸術は、少なくとも上演中は、身体の安全と思考の自由を保障する安全地帯として機能します。また、演劇に関しては、実際に演じるという行為を通して、自分と異なる考えを持つ他者への想像力を養うことができる点も、現実を生き延びる上で役に立ちます。既に教育現場や一部の公共劇場等で行われているそうした演劇的实践について知ることができたのも、アーツアカデミーでの日々の学びがあったからです。

舞台芸術における社会共生・多文化共生事業の取り組みはまだ始まったばかりで、課題はたくさんあります。それでも、自分がこれまで生かされてきた演劇の、制作としての経験を活かして、現実の課題に向き合うことができるのであれば、目の前のことから取り組んでいきたいと思っています。そうした思いから、2022年10月より、アーツカウンシル東京の社会共生意業担当としての仕事に取り組むことになりました。1年半の間、ここに書き記せないほどの多くの学びを与えてくださったアーツアカデミーと、東京芸術劇場に関わるすべての皆さまに感謝します。本当にありがとうございます。10周年おめでとうございました。



「アーツアカデミーで学んだこと」



「できないことを見つける1年間」

私がアーツアカデミー研修に参加した理由は、自分が出演する/演出する以外のやり方で、あるジャンルの将来を変える方法を知りたかったからです。

私は舞台芸術の中でもニッチなマイムというジャンルで活動しており、それは主に俳優・演出としてのものでした。しかし思うように結果を出せず、これからの人生でどのように舞台芸術に関わっていくかを悩んでいました。

「制作」という職能に興味をもったのは、2019年に訪れたアヴィニョン演劇祭で、フランスの現代サーカスに出会ったことがきっかけです。既存の演劇やダンスやパフォーマンスと似ているようで全く違う、新しい感覚を与えてくれるそれらの表現に衝撃を受けました。どうすれば日本でもそのような表現が生まれるかを考えた時、日本における現代サーカスという新しいジャンルの開拓に、田中末知子さん（瀬戸内サーカスファクトリー）や酒井淳美さん（世田谷パブリックシアター）などの「制作者」が大きな役割を果たしていることを知りました。既存の枠組みに当てはまらない表現を外から連れてくることや、内からその芽を育むこと、それらを世に出すこと、そうやって既存の枠組みを徐々に変形させて、新しいものにすること。そういった根本的なクリエイティブさが「制作」という職能の可能性であることに気付かされました。

しかし同じ舞台芸術の世界でも、パフォーマーとは全く異なる専門性をもった「制作者」というキャリアをスタートする方法は自明ではなく、当時30歳となっていた自分には、あまり時間がないということだけはわかっていました。仕事の片手間に講座を受けるといった方法では、自分の状況を劇的に変えることはできないという予感もあり、「制作」の経験を積めるフルタイムの現場で、かつ経済的に持続可能な環境を探していたときに、アーツアカデミー研修の募集を見つけました。幸い教育普及分野の長期研修生として採用いただき、そのことが今の制作者としての仕事につながっています。

研修で有難かったのは、それがOJT方式で実際の業務に携わるものであったことと、思考や体験の言語化が絶えず求められること、そして1年間という長期的なものであったことです。それらは強烈な失敗の体験と、自分を見つめ直す習

慣と、そしてリベンジのチャンスを与えてくれました。

研修は失敗の体験に事欠きません。特に印象深いのは、ある関連企画の展示に自分の企画案が採用されたときのことです。6月末の実施に向けて準備するといっても、まだ制作の仕事の右も左も分かりませんでした。振り返ってみると、それまでの「自分中心の思考」をひきずったまま業務に関わっており、その企画は課題が多く残るものとなりました。悔しさに拍車をかけたのは、企画に関わった職員もゲストも外部スタッフも、それまでの自分には縁遠い、第一線で活躍する人たちだったのに、そのチャンスを活かせなかったことでした。

毎週毎月提出するレポートや、ターム毎にまとめる報告書も、私にとっては失敗の連続でした。同期は元コンサルタントだったり、東京藝術大学の元研究員だったりとする優秀で、一朝一夕では埋めることのできない能力の差が、レポートの形をとってはつきり顕れることにいつも頭を抱えていました。その差を繰り返し経験するなかで、「自分は大した人間ではない」という実感が、自虐ではなく事実として腑に落ちるようになりました。だからこそ「他人を中心に据えて考える」ことが必要なのだということに、私は徐々に慣れていきました。

研修の最後に多文化共生に関わる2つの企画を主担当として任せられたことが、私のリベンジの機会となりました。そのリベンジが成功したと考える理由は、端的に言って、それまでとは違うやり方で物事を進めることができたからです。「自分が生み出せる価値は何か」ではなく、関わっている「その人が生み出せる価値は何か」を拠り所にしてきたからです。

今はSPAC・静岡県舞台芸術センターの芸術局制作部に所属するスタッフとして働いており、仕事の内容はこれ以上ないほど面白いものだと感じています。同じ公立劇場でも土地や組織が違えば考え方は全く異なり、東京芸術劇場での経験が直接活かせることばかりではありません。しかし当時の自分に言葉をかけるとしたら、「自分は大したことない」と思うようなことがあったとしたら、その経験は大事にしろ、といたい。結局のところ、そういう感覚が初めてではないということが、今一番役に立っているからです。

「大学にはサバティカルってあるんですね。一定期間働めた教員が、長期休暇で国内や海外に行き、少し立ち止まって自分の考えを見直すという時間——みなさんは、アカデミーに参加したことで人生をちょっと見直す一年を過ごせたのではないのでしょうか」

研修を締めくくる講評会のなかで、高萩宏前副館長はわたしたちにこう語っていた。いまでも時々思い出す。アーツアカデミーの研修期間がサバティカルであったというのは、わたしにとってどこか腑に落ちるように思えたからだ。

もともと、制作を目指して音楽の勉強をしてきたわけではない。音楽大学を志望したのは作曲を学ぼうと思ったから。それが、在学中に先輩や同輩たちの公演を手伝っているうちに、どうやらこのウラカタの仕事にも拡がりがありそうだ、と気づき、どこかで時間をとって向き合ってみたいな、と頭の片隅で思い続けていた。その時点では制作ということばすらぼんやりとしか認識していないような状態で、いわば野生の制作見習いのような身の程だった。あらゆることに素手で挑むような仕事のしかたで、それゆえのラッキーもあったかもしれないが、当然限界もたくさんあった。だからこそ、右も左も分からないなりに、いきおいアーツアカデミーに募集してみたのだった。

実務研修でかかわった芸劇オーケストラ・アカデミー・フォー・ウィンドは、わたしよりも少し年下の音楽家たちが集うアカデミープログラムで、もう一歩先のキャリアを掴もうと、オーディションやコンクールに勤しむ在籍生が多かった。自分自身が研修生でありながら、アカデミー生たちの傍らに立って仕事をするというこの二重の立場には、独特の緊張感があった。だからこそなのか、アカデミー生たちの音楽や振る舞い、言葉の端々に、どうしても悩みや言葉にしきれない不安のようなものを感じ取ってしまう。アカデミー生たちも芸劇に通いながら、ここで自分を見つめ直している——そんな淡くもやもやした思いに寄り添いながら研修期間を過ごしてみると、真に音楽家の力になるとはどういうことなのか、ひいては、制作という仕事が正しく文化の担い手であるためになにができるのかを、否が応でも考えるようになった。

それにしても、とかくこの仕事は忙しい。いつも中腰の気分、車にぶつかるように仕事が発生する。誤解をおそれずにいえば、仕事がイヤになるきっかけがそこかしこに溢れている。「芸術の仕事が続いていると時に“人間”が腐ってしまう」と、実務研修中ある舞台関係者はゼミで漏らしていた。そういうものなのかもしれない、と、すんなり受け取ってしまいそうな自分もいた。

とはいえ、こんな風に悟ったところで一人前になれるのかというと、そういうことはない。それどころか研修中には、片方で理不尽な忙しさを訴えながら、もう片方でおのずから理不尽な忙しさを再生産してしまう、という悪循環が生じている瞬間にも出くわした。この仕事には、そうした毒の側面がある。修了報告書ではそれを「疲労に居直る/疲労を引き受ける」という対立項を立てて説明しようとした。制作の仕事にはグランドセオリーがあるわけではない。個別具体的なプロジェクトが、ただ膨大な数あるばかりだ。実務研修での一番の学びはそれかもしれない。

「35という年齢は自分が何者かわかっている歳だ」とは、作曲家ルチアーノ・ベリオのことば（だから作曲コンクールは35歳までを上限にして構わないのだ、という文脈での発言だったはず）。ベリオに思いっきり甘えて、30前後という歳をまだまだ迷い続ける時期だと捉えてみたい。アーツアカデミーに参加したこの一年は、自分自身のキャリアプランとじっくり向き合えただけでなく、先述した忙しみの引き受け方についてもじっくりと考えることができた。この一年で考えたこと、肌で感じたことは、今後の自分の働き方の基調をなすものとして、長く思い出すことになるだろう。入る前とあとで自分が丸ごと入れ替わってしまうみたい、特殊な時間を過ごすことができた。大学を出たあとで、こういう時間を持てたことはとても幸運だったと思う。なによりも、アカデミーに在籍する音楽家のみなさんに触発されて、ひたすら前を向きトライし続けることができた。これからアーツアカデミーに参加する人々にも、このサバティカル的な時間が訪れることを願うばかりだ。



「サバティカルとしてのアーツアカデミー」



「いつか踏み出したかった一歩が」

2020年のクリスマスイブ、コロナ禍で迎える初めての手持無沙汰な年末に、何の気なしにSNSを眺めていたらふいに目に飛び込んできた「令和3年度アーツアカデミー研修生募集開始!」の文字。その時直感的に「これだ!」と思ったのが、私がアーツアカデミー研修に応募したきっかけでした。物心がついた時から演劇が好きで、「いつか演劇に関わる仕事がしたい」と漠然と希望を抱きながら、大学では建築を専攻し、劇場の設計や、劇場とまちづくりをテーマにした研究に取り組みました。その後新卒で入社した会社では、建築分野の技術者としてまちづくりのプロジェクトに参画し、大きなやりがいを感じていましたが、演劇自体を作ることへの関心も消えたわけではなく、幼少期から抱いていた興味の炎は胸の片隅に密やかにずっと燃え続けていました。

だからといって、はじめの一歩をどう踏み出すか。未経験で、新卒でもなく、人材の公募自体が少ない業界に飛び込むには何の手掛かりもありませんでした。新しいことに挑戦するというのは、いつでもわくわくすることである一方で、ある種の怖さも伴うものです。大人になればなるほど、“知らない”に直面することが怖くなる。けれども、キャリアチェンジを目的に掲げるプログラムならば、“知らない”がマイナスに働くことはないはず。むしろ知らないからこそ楽しめる! そう考えて、20代最後の1年間を、学び、吸収し、考えることに思う存分投資することに決めました。

実際、その目標は大いに達成されました。30歳を前に、自分の得意なこと、興味があること、人生で大事にしたいこと、といった自分自身を知るための棚卸しをじっくり進めていきました。文章を書くのが好きだとか、パワポ資料を作るのが得意だとか、休みなく働くのは向いていないとか、字幕や脚本の翻訳の仕事にやりがいを感じるだとか、そうした普段何気なく暮らしていると当たり前すぎて見過ごしてしまうような、無意識の領域にある自分の性質や傾向に改めて向き合うことができた時間でした。

これはひとえに、研修期間中の執筆機会の多さと、サポート的な職員の方の存在に支えられたものだと感じています。週報、月報、ターム終わりのレポートと、研修生には多くの執筆機会が与えられます。自分の考えを文章にまとめていく作業を通して、自分の心が動いた瞬間や、経験を通して考えが変わっていく過程を自ずとつぶさに観察することになりま

した。そして、研修生であってもチームの一員として受け入れてくださった職員の方々が、仕事を任せてくれたり、頼ってくれたりしたおかげで、自分としてはまだまだそこまで…と思っていたことが、実はプロジェクトのために役に立つ戦力になるのだと信じられたことは、確かな自信になりました。

アーツアカデミー研修を通して私が得た最も価値あるものは、忌憚なく意見を交わしあえる仲間です。9期生として集まったのは、これまでのキャリアも育った環境も興味のある芸術分野も何もかも異なる6人の同世代たち。自分の発言に対して思いもよらない角度からのコメントを受けて、はっとさせられたことは一度や二度ではありません。

自分を開き、他者の発言に素直に耳を傾けることで、さらに考えを深めていけるようなコミュニケーションが心地よくて、取り繕いや遠慮といったものが次第にほどけてゆき、半年経つ頃にはすっかり弱いところも見せられるようになっていました。各々が自分の進むべき道を真剣に模索する姿を惜しげもなくさらけ出して、お互いに見守っている関係性でいられる、同僚でも友人でもない、同志のような存在が大人になってからできるとは、思いがけない豊かな出会いでした。

アーツアカデミー研修の長期プログラムの実施期間は1年間。たった1年だけれど、かけがえのない1年は、間違いなく私の人生のターニングポイントの1つです。あのクリスマスイブの日、何かに導かれるように現れた道に勇気を出して踏み出したからこそ、今があります。「いつか」と願いつつ一歩を、願うだけで終わらせなくてよかったと思っています。踏み出せば、その先に必ず道は続いていく。たとえ遠回りでも、結果的に戻ってきてしまっても、途中で止まっても、それは歩みを進めたからこそ訪れる展開です。心に思っているだけでは変化はありません。小さくても行動を積み重ねていけば、次の選択肢が見えてくるものです。私の同期の仲間たちも、それぞれの新しい一歩を踏み出し始めています。いずれもきっとロールモデルのほとんどいない、手探りの道です。今は離れた場所にいても、心から尊敬し、応援したいと思える仲間の存在は尊く、自分自身にとっても日々を戦う原動力になっています。

アーツアカデミー研修が、また別の誰かの人生を動かす一歩になり、経験と人材との豊かな出会いの場となることを期待して、20年、30年と、長く続いていくことを願います。

アーツアカデミー研修に応募した時、私は30歳でした。学生時代は漠然と「三十路になる頃にはある程度のキャリアを積んでいたい」と考えていましたが、いざその歳になってみると、10年後、20年後のキャリアが見えない状況に不安を抱えていました。このままではいけない、何かアクションを起こさなくてはと転職活動を始めたものの、なかなか結果につながらずに暗中模索の1年を過ごしました。アカデミーの募集を見つけたのはその年の暮れで、それまで何度も応募先から「お祈り」されていた身としては、「これに受かるために今まで落ちてきたんだ」と思うようなタイミングでした。

そうして前職を辞め、齢30にして無職となって挑んだ長期研修では、本当に多くのことを学ばせていただきました。ゼミや実務研修はもちろんのこと、たくさんの方、そして全国文化施設との出会いも、私の大きな糧となりました。特に芸劇の事業第1係の皆さんからは、毎日たくさんのお話を聞かせていただきました。知らないアーティスト、知らない曲を教えていただくたび、自分の世界が広がっていくのを感じました。他館訪問研修では、研修初日に頂いた芸劇のロゴ入り名刺を携えいくつもの文化施設を訪ね、それぞれの取り組みについてお話を伺いながら、「ここで働いたらどんな人生になるだろうか」と空想するのも楽しかったです。

研修中、意外だったのは「自分が思っているよりも、周りから『経験を積んだ人』と認識してもらえる」ことでした。身ひとつで乗り込んだつもりでしたが、これまでの自分の経験や経歴が、存外多くの場面で自分を助けてくれたのです。特に、メインに関わった芸劇オーケストラ・アカデミー・フ

ォー・ウインド事業での業務を積み重ねるうちに、今後どこでも通用する経験値は十分に積んでいると自分を捉え直すことができました。アーツアカデミーに応募した当時、転職が思うようにいかず、自分に自信が持てなくなっていたことを思えば、これは大きなマインドの変化でした。

私の次の職場は、名古屋市がこのほど新しく設立する「クリエイティブ・リンク・ナゴヤ（名古屋版アーツカウンシル）」です。自分がまさか中間支援団体に、しかも関東圏以外の新設団体に応募するとは、研修前の私は想像もしていませんでした。前々から抱いていたふたつの夢、「音楽家が自分のプロフェッショナルな領域で食い扶持が稼げるようになってほしい」「音楽家が社会を回している一員としてもっと認識されてほしい」は変わらないまま、ビジョン実現のチャンスはどんなところにもあると気づいたことで、私のキャリア選択は一気に幅が広がりました。このことは、私のアーツアカデミー生活の中で一番の収穫だったとも言えるでしょう。これから立ち上がる団体なので、様々な困難もあろうかと予想しますが、いつかアカデミーの先輩として胸を張って後輩を迎えられたらと思います。

アーツアカデミーはまるでトンネルのようです。入ってみればとにかく走るしかなく、暗さのあまり自分自身が見えなくなる。けれどやっとの思いで抜けると、サッと視界が晴れ、後ろを振り返れば昔の自分ははるか遠くに見えます。ここにアカデミー10周年をお祝いするとともに、10期生として私を迎え入れてくださったことに、改めて感謝申し上げます。



「人生の幅を広げてくれた研修」



10期 長期コース 教育普及分野

松本知珠 Tomomi Matsumoto

座・高円寺 / NPO 法人 劇場創造ネットワーク

「つながりを紡ぎ、前へ」

私がこの研修を知ったのは、8期生募集の告知がはじまった頃でした。ある公共ホールの指定管理者を担う組織に属していた私は、このまま働きつづけることに疑問を感じ、この研修を受けてみたいという思う一方、仕事を退職して新たな世界へ飛び出す勇気が持てずにいました。

長く逡巡の時間を過ごしているなかで、9期 豊島さんと偶然知り合いました。豊島さんから研修に関するお話を伺い、やはり自分もこの研修を受けて、アートマネジメントにおけるプロフェッショナル人材になりたいという思いを強く抱きました。そして運よく10期生として拾って頂き、今があります。

内定後、打ち合わせのため、座・高円寺に向かう最中、高萩前副館長に偶然お会いしました。高萩前副館長は、新たな職場での勤務に緊張する私にあたたかいお言葉をくださいました。この研修を受けなければ、高萩前副館長とのつながりを紡ぐこともなかったでしょう。この研修では、東京芸術劇場をはじめとする多くの劇場関係者の方とのつながりを紡ぐことができました。

この研修で得たもので、最も大切にしたいのが、同期とのつながりです。座学受講に実務研修、週ごと・月ごとの学びをまとめた週報・月報提出、そしてタームごとに提出する報告書準備、この研修は非常に忙しいです。研修を受け出してから2ヶ月間は、とくに辛かったです。あまり眠れず、心休まる間などありませんでした。職場で実務研修を受け、家で座学の課題や週報・月報に取り組む日々がつづきました。何度も心が折れそうでした。そんな日々を支えてくれたのが、同期の存在です。年齢もバックグラウンドも異なるけれど、将来への思いは同じ10期生。彼女たちとの支え合いがなければ、研修を途中で辞めていたかもしれません。苦楽を共にした彼女たちだからこそ、研修後も事あるごとについて悩みを相談してしまいます。非常に心強い仲間です。

劇場には、さまざまなひとが集います。働き方もひとそれぞれです。プロフェッショナル人材としてどのように働き、どのように道を進んでいくのか、研修を終えたいまも問いつづけている日々がつづいています。私は、この研修で紡いだつながりを糧に、この自問自答の日々をこれからも進みつづけていきたいと思っています。

年度別 修了生一覧

年度	研修開始年度	研修コース・分野	氏名	所属・肩書(2023年1月現在)	
1期	2013年度	長期(2年間)	演劇制作	黒田 忍	東京芸術劇場 事業企画課事業第二係
		長期(1年間)	演劇制作	手代木麻里	フリーランス(翻訳者)
		長期(2年間)	音楽制作	大丸敦子	
		短期	演劇制作	木村孔三	
		短期	音楽制作	横堀応彦	跡見学園女子大学 専任講師
		短期	舞台技術(照明)	村田彩香	
2期	2014年度	長期(1年間)	舞台技術(照明)	柴田晴香	フリーランス(漫画家・イラストレーター)
		長期(1年間)	舞台技術(舞台)	劉 周英	
		短期	演劇制作	師岡斐子	
		短期	音楽制作	安藤綾乃	北上市文化交流センター さくらホール 企画事業課
		短期	舞台技術(音響)	杉浦 綾	音響芸術専門学校 教員
3期	2015年度	長期(2年間)	演劇制作	佐々木千尋	東京芸術劇場 事業企画課事業第二係
		長期(1年間)	演劇制作	菅井新菜	
		長期(1年間)	音楽制作	中粉将樹	リューとびあ新潟市芸術文化会館 事業企画部 音楽企画課
		短期	音楽制作	宮下ゆかり	
		短期	音楽制作	伊東絵里子	東京芸術劇場 管理課管理係
4期	2016年度	長期(1年間)	音楽制作	今井俊介	東京芸術劇場 事業企画課事業第一係
		長期(1年間)	音楽制作	柳澤 藍	DUMISTE/デュミスト(フランスの音楽家国家資格 DUMI取得者)
5期	2017年度	長期(1年間)	演劇制作	鹿野遼太郎	某企業勤務
		長期(1年間)	音楽制作	梶山泰弘	東京文化会館 管理課管理係(舞台管理担当)
		短期	教育普及	奥本真司	AHCグループ株式会社
		短期	教育普及	山際真奈	東京国立近代美術館企画課教育普及室 研究員
6期	2018年度	長期(1年間)	音楽制作	五田詩朗	公益財団法人 練馬区文化振興協会(練馬文化センター)
		長期(2年間)	演劇制作/教育普及	山本佳奈	
7期	2019年度	長期(1年間)	演劇制作	松岡大貴	豊岡演劇祭2022プロデューサー、コーディネーター/一般社団法人Cos代表理事
		長期(1年間)	演劇制作	結城ゆりえ	国際交流基金 文化事業部 舞台芸術チーム
		長期(1年間)	教育普及	藤澤祐子	岡山芸術創造劇場
8期	2020年度	長期(1年間)	教育普及	黒木裕太	フリーランス(ワークショップ・障害者アーツ制作、ダンサー、振付家)
		長期(1年間)	教育普及	山内佑太	東京文化会館 管理課管理係
		短期	演劇制作	高山未来	FUTUR STUDIO/一般社団法人日本ショー&パフォーマンス協会 代表
9期	2021年度	長期(2年間)	演劇制作/教育普及	小山彩花	アーツカウンシル東京 社会共生担当
		長期(1年間)	演劇制作	佐々木クリスティアン隼人	株式会社シアターワークショップ
		長期(1年間)	演劇制作	前田真美	株式会社ホリプロ 公演事業本部 ファクトリー部
		長期(1年間)	教育普及	豊島勇士	公益財団法人静岡県舞台芸術センター SPAC 制作部
		短期	音楽制作	小林篤茂	ギタリスト/合同会社Sunshine of Your Love代表社員/一般社団法人Jazz Arts Ensemble of Tokyo代表理事
10期	2022年度	短期	音楽制作	前久保 諒	フリーランス(作曲家/楽団制作)
		長期(1年間)	音楽制作	半田 萌	クリエイティブ・リンク・ナゴヤ 事業・広報グループ コーディネーター
		長期(1年間)	教育普及	松本知珠	座・高円寺 / NPO法人劇場創造ネットワーク